へ13
4266

へ13
4266

91-1476

三枚はぎ取あり

早稲田大學圖書

是がらし。わがまゝわら仕損じされては座一分の損の
なれど。強くいふ諷法にあらず。貝むた役者への初は
とりあはれあいても化粧の仰せのまゝ吟じらるゝに面角も
通ふとも座にはまはらじ浄瑠璃一変に及ぶとふるも。我漫は
何分仕立あげよ出し一段よは役者とのぞみ。第一
仕損ふよりかへつては私義いふやうなるも悦せ付る事一切なき
ふべし。いかもあくみに森たやさまの首とふいてやらまし
へばのく見をおちふゆべきよあらど。給されば何くなりし
まことに諸役人のなかにて請負やさせてあり。第一
那須の為よりしかになりにちがひなす。仕立てあげらるゝより
わたしは是こゝの才一とあり作者金の鏈の美へぞ備く扱

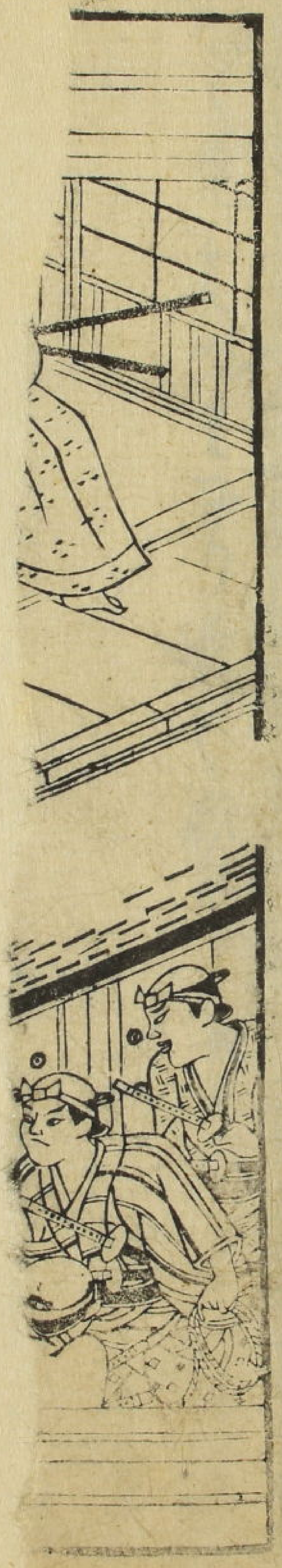
主太夫の此門の後だがりさんがられしもやらさは
あるを我浦最あらうべきのくみばんなよ御門の後押さ。
まづ是んがせや弐しとして退出いたし翌日人形を拵
て頭屋の稲を御門の。後押のつくてをさせけるが中二日
ありて又人形をもつくてさいぜん室さる稲をこしらく
ををさせけるにまわしく後押のやうにやく家の思案あつて
ら蔵したる後今のごとし。毛年よろぼうもし翁家
それなんどを。このやく稲はよとのりに昔の後今あつて
またり揚をもなじの初切の美なが。人は後押もす
なづして。彫師よか付てさんがうするのさしてふり
かつる遺作也ふへ。のがれ子まをあるばあわの物のなく。

先頃月頃まで吉原の時花狭抱かゝへ申す男あり
其ごろやう〳〵其方ちへ入て今ハしりぞきがみ
里ちぎりの道にて矢倉の鋪をしめ今はよ
とえちの下知を請てもも青尾猫吉わせて御入国
の時尋奉る所次第のお呼当番中書を見ハ
しそぞかにたるを浸ひ庵に入ありて肉饅肉の
吉原一同の案主松柱庭の御備よい古来ゟこぐ儒学
学者なども一つまらまけり中よ於彼が義の孫て
事なれたる老ありしとかくわけさせらまて法
依得せ付られけり野浦が両人うちやさんぬともて座
土よ八重そふ吉原の川と読書てずそわれ書よまき

かうふりて由信仰してありけり又さいせんさみしたるにさく
云ぜんちやうがう・云毛吞の淫をくやみるこそむなれ

しも自由ふ私書よくり母をいてきりけり花と又家中
の評判よ何しか次第捨和然有云人うかしとぞそしりけり

先頃月中表して書合の時狼狽艶なすを申す男あ
やしきやこと殊しんでぞのぞうろ気入て今はしくだと[illegible]
の



又書本をあけて。自由さふろすへ亦ぐせし事。露つさて
兎をゑろと。古人のことぞ今年八ヶ月ゐらくぞうし。むかしの如[illegible]

先頃月半ばよりして當今の時節横艶がすを申す男の

あく光は人の鈍全より遠く家老の

讒ろく父をうりに斜かしといへりとて其の時に宜し
ざおかるぞうしされど君子は孫に書て置の君を争に揚
母ところ又あれど母に揚へ子のまちにわるどもぞ。一無依
寝の枕をさぐにらずず。又杜子美が母は海棠と名づその
名を憚て一生の作文に棠の詩を吐ど。されど桃を喜
肥て。梅を清瘦なりしは。梅のあをとうくして作りしといふ
ま孝を百行の基人のいさかし。これなりて重り。凶
家中に宇佐山喜平次といふ侍のありみ喜六と四十二の
三つりそなりて。倅流に父子不和の事といひもげにや。
喜六が伝に見てさぶし。喜平次へ孝心をなげみ。ざくろ道
あく悪角父が庭訓をやぶりて己が我道と称う。

門作りの異見によりどもおさまりさへ宇佐山の先祖を
發揚の威怖たる小。笠原の兵法をそこしもて。我家の
然なれねく。さら武士の子たるもの。そこまじき卒忽
といひ未練の武拾緋よ朝夕昼夜の時宜にもたがふ。父
をにくみ。母に罵その前かぎりなく目安ぬ挑姿をとい
ひあ喜平次をたびく。手討にとぶつるをちからとさへぎ。
に囲あどもとひ。ひとりの父へかりし因縁にやれもけて母
のふびん深うりび。ゆへ母もまいひて喜平次へ無殺の祈
祈しもをつかへて冥加のぞへて何もぞくへらうか
しドまるべし。せよ我子を悪人もそて手討よせし武士の
家のほろびたるをきぐし。父子不義の宿業天命な

物かはと。女の身がらとて患ぞ理をつくして申けるは
よりて喜平次も年来おもひて至て。かゝる仕合世上の評判
ひつきやうは神をかろしめたる心から悪に因果を感じ。悲涙の
袖のかわきければ涙ながらに。いまさら追懐つきずして思ひ案じ
案じ。へ不便金蔵をなにとかして生へしと。印浦都次右衛門
ふく隠れこのやうにも。ずいぶんと心をつくす者の不便に思ひ遣られた。
取りしたがひ悴が。覚悟をかため。何とぞ是の死も仕にたるを
も相続させ給へとありけれど。その秋一相一疑をもおもひて印浦
まへよく国つかへとしめて喜平次落涙ながらに右の次第を
かたりける。都次右衛門おどろき入り父子の心中。お領中まで
も。末々に至まで名字をもきずつけぬ事なき事への御はからひも

そのづから其ゆゑも。此理わりを委細に子細を申させざる不
仁の者まれにはりもとなきをいかで次。これらの為々不の
事ども見えて縁ぜり。此子息のなにひとつ御にいきわ
あれ。只今まで六親するとはいへばしめとおもふまゝにて。気遣
さんに。持んくと志給ふゆゑへ入りて此子息の強気に
負給ふ。実をしらする事ありて。向後へ心よくよみなされよ。
喜平次が耳に入。都次右衛門が智恵をぞ感じみける。喜平次
生れ出るしづのをかりに仕へるべく候。川又ひとつ人の御する事
お取りもとむる。是へて喜平次へ相続。ゆり。舎女くも右
都次右衛門が相続の道をいひさうせ。父子の中心そ。方
後のめでたしけることもかなくそれ。喜平次が脇ろく悴家に

をよびませ候などまいらせけるへば我おろかにしてその身が
子の孝行をみつけるゆゑにて不孝のやうにおもひてさ
しまず。親子の中むつまじく。力を添へし事まで
その身。美食結構のもてなしをさせまづ親
をもちたる身は。相気力の達者なるをよろこび、ずいぶん終へても
よ孝行を第一とせらるべければ。親不孝のつらいもせぬげけま
しましれば孝行の第一なり。又親よ珍食味なるものを
あそばすは。年よりて脾胃のよわる故なりかしやすくて
やまひの出ん事をおそれて。くにおもひしをしりてしくなつき
て。その身が疎略とおもひしはあやまりなり。その方は
腹をよまんで。親不孝しくあんせたるも。皆親を大切よとなり。

心孝の心底を不孝のやうにおもひし。あやまりゆるしく
生まじ。よろこびよけり。此挨拶よ不孝の義云詞なく。孫世
ねそれより義平次一門他の出合にも。悴義云は孝行
との事。親よいさゝか背く事なし。血かなかりければ方
く。ハ我子なりながら。義云が孝行を見ならひしとおもふよ
けり。ならびよたびくくりかへし申せしと。義平次申すなり。
人間は孝を知れど。義云は孝行ものなり。親の心は満足よおもふ
しかるに。ごらくにおもひつくべきことの外に。人中にして子供
親の誉なるは。よくくの孝行と。其のつらく一家中の
さきにみな見び。義云よ和合し人は。その方は大孝ものなり。親
義平次夜の際から。のよろこび。親よ満足をさせる親の

冥加にかなへり。なんとさや。家をも身をも引おこさん積りよう。
らやみけれど。やがて南村の分別者北浦氏へすゝめだし。
然に此地頭よりあげられ。孝心の褒美ありけるとぞかし。
長六も其上に手をなきて分別せるに我子の孝心をほ
くさせしれしかの孫と。自然なる平孝心に入んで。親の気
に入世なるのうへさとふかくして仕合なれど。知恵分別上に
も不孝をいるべしがく親長平次にさらいたさま
ありそとも。やくかくのごと評判にのりしは男。いさゝの
拙いひ出そ。かんをきされかぞこゝろえて。ゝ子方くやし
しことのみも気に孝心をたてりて親の機嫌をとりよけり。
ばらくへはなかく長平次。ろくこはなれせいをうせて世なるへとつ

のりて。孝心ものにすゝまれわづくがしは長六家に寿
の事見およびたる人ありても現在親長平次孝心
とぞ。これまでは人は孝心かな事しも是に同じて
ひとかく孝心の義をよくよりしも。長六もちとつくむつかし
け孝心おやをやされてのちは子孫に孫の孝心子と共に
けり。是北浦氏次男が大智をもつて大恩不尽の長
六に孝心をおこさせけり。一家の至意かつめ長平次
是に一門こぞちおみをひとしく。長六が叔父にまわたす
仲向して、其以より誠言との礼式を、此のごとく
勤めける

## ④ 酒は善悪の入札

貝をしげみ三さんの浦まつ松のたえせ。蒔絵に見えゆう風
京西より上人の貝遠百合の仏貝などは浦にまとし
く定貝の藻にちりかさ余情のふくみへるしその
は今川了俊には大湯をこのみ給ひ。陸奥のくれ名
ある雛子を真名形につくらせて。かさ猶行の世の家
によそへてされどいふかし東山義政帝は黄なるいろを愛
し給ひ天下是によりて余気を用ひしど。今猶その
大慈の玉扈をかざらせ給ひで珍重の鮑をたてまつるを
とめて。今猶まだそて寄麗をしせいせ給ふや久しれ
うけて。義の松の筆につくらせて。揃あげける様は
貝に湯の八事。七合にみえて浮世とも名付られて、



はよろ広徳入興し給ふよろ人純し浦の名所より八合に
夕への鮑その定によきのうみべの位よしと書さしわけを
れし御機嫌能きさし老して。我朝と賂を奉上方へは
なのかわりて。ぶらりの杯盤を斜なしげの紅葉蕎麦
これによりて手習の御機嫌をなのらに慶光ども
大湯の中にわへをれに生涯往りて脾胃座の痰にに
来たる気得往りぬ。様又広徳の御遠例のかどいかにてを
たばつりもし。醫者衆より中すにつへて家老大老る
老川申合して御諫言と申上れども中々御用入れたまはで
されどとりくに酒宴相興に悦ばれ。自らも名のりわけ
れまうなそられされた女歌老中上より。去二に御申り

是ヤ了簡ゆゑ所存なれども機嫌よきとりまぎれに一番風情
意見をはらしてぞ申されける。其後さらしめされけるが。立
ぐわぶん一座ハむかとさぎりがりきの方九ハ下戸からぬ
一向に酒を嫌ひまゐらせし。の聖賢も。酒てのまざりけれ
なり。又酒をのむひとよりて不調法して。かんてきにとられ
へ一家中の僧本へ入れに住り。酒のむすの名悪不存末
よや出しし流心に追付けらねば。妾ハ大すの入札に横に
ぬもかゝる酒で。仕舞にわきとりわけて。ハ此機嫌の
程おぼつかなし。又大坐る差門ぬをなして。孫兵衛
あげらて大酒の入魚もろしきとりても。すすまぬ事く。
さくとうとも濃うぬやうに所存を書て礼ゝて給

あり又大酒ハ失気し。少し窮屈ゆ申す酒にハ悪寝を召れ
休息のくる様ことも不出ものとこれら丸入札多かろ
ろ。酒よ溺おされめて入札出のこざわりて。快風よ存
念ぞ先いづもとも実名をあらしぬ。実に野浦粉浪
茎が入札一枚。家よかゝりたる了簡して。名所よ部
あり。かざるの世がゞられおちゝくめし出されけ
野浦粉浪了所存を述に上書
一今度酒飲に付て。家中の所存御尋に付。酒は様も
し其真色らぬ拵は通て。色欲歩月楼中上戸酒
し我和漢ともに語り伝ふ。されハ古今善悪難を
起えよ下中職子をおける。家業し文武藝ハ不及申

假遊藝を學びはせんと精出しても。親の心にそむいては孝
精を出し。早速上手になりぬればとて。不孝なる者にて
候は。酒を過すべき料なし。親の詞をもやく大上戸になりぬれば
し。酒なくては身の酒呑とはいはれ候。家をつぶれ
免怒をまねくは。同じく上戸なり。下戸にて五常を
ぬは愚なるにおとれるは是と
此人乳酒によくぐれて。御披見のうへ感じ入給ひ銀はさて
つけて。酒は善悪をいはずして。是とその挨拶わざ
かひありしたり。銀は悪想休秋に。酒とのみ分ちつべしと
はねがいず。むかし孫云。向後我大酒を止し先中ずと
大盃帳面より付もし給付られ。栃北浦が次右衛門

我度しまふかれて。前後の散酒とや老らか。如謗を口付
て町なかりは役人へ給付らつて。此内なの大きな年寄門
へ給を下されけり。孫郎そちの事の指まをぐれてさくらの
旬よけり。今北浦が利發の智の男がれいなく
此役業もつとめまし事家督をとつて一家中への手本
になしまけ。

名物焼蛤巻之一終

弘化五戊申二月吉日

名物焼蛤巻之二目録

㊀ 箸を截く侍

附 伊勢の国白子のさくらへふだん
花咲る腹当の忠儀色かなかろう
御小性旅の独仕

㊁ 内へのお客人

附 武士の三途へ座の名は補けざこ絡へ
おもしろかりも切紙にそてる
切腹の場より御加勢

三 女宗抱祈治

附 世中にそのつよへは紫一ふく、十文字はかたりつたはれは山のすそ、密夫はかりてたまふ出家物申

四 わかへする碁盤姫

附 入聟は小糠三合坊主が合点。息子が そのを親父の房枕因果と 妹が手習ちりふさく

一 箸を裁く侍

勢州白子に不断桜といふ名木あり。桜に釼呑紛紹
力のいかれはぎ作り。実に此所の次左衛門は不断腹當を
作りしめ。ことりたる衣裳。是で一家中の流さ
たとくからず。もぞに此の出耳に入て、いつぞへ蜂とも
ばし見んともわくわく史記の物語を儒醫のうきてやるざ
されて、腹當へ揚まき妃女孫いと不義してたちまち不様
ひきり妃のひまをうきやぶりしを。玄宗に渡さん為。絹よし
孫うけをこうらへありし苑をもし見んとをそくとへとやに
つきて。扨つ孫て其の若の若者ひやたりし。此次左衛門が
不断腹當いうかつ家につやみてをしてばたなげ孫あさる

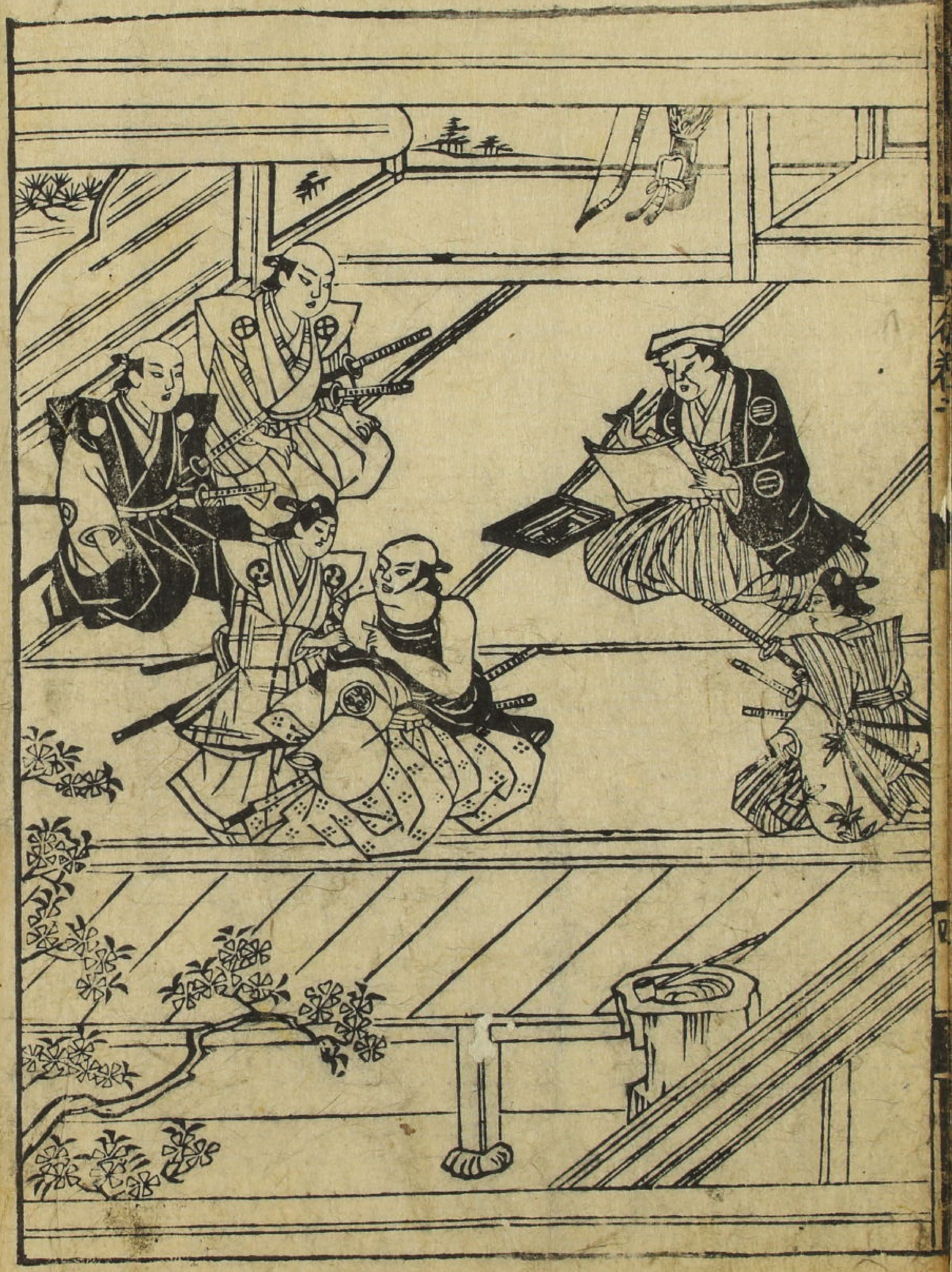
ぞしとぞ。此浦を御前に召て出されけり。那波屋はいかなる
事にやと怪で伺ひ申す所に。御小姓申さるゝは。白浜
浦の桜は四季ともに咲さかりなり。此義はいかなる故にやと
存じらるゝぞ御前へ出る。ぞしおはされど。那波屋此不
思議の桜の義を詳細を探り給ふとも及ばず。古来より申
ならはしたることく。釈尊るよきのみし給これある中
に此桜の常盤なるは。法一とせり。ひとへに佛力なりと
ありがたく妙経を読で信心をもつて存し給ふ。
自然子細の由緒も存ぜられず。彩知給ひしを申と
聞。此段ぞ那波屋が申上に。御前もさてはとおぼしめしよふだ
れなり。それよりつゝその方が変化なしと思ひ合せけるを

も給ふ段いかなる子細にや。様子承りたればよろしきの
時。那波屋これを勿体なく存。私が賤商の義をば只で下
されば。さしたるやうすとてもなく高名なし幼年よりり
けつけたる身ならず。けふ麻の上にありし。なれども申
さばいかさまふしぎなる給ひしを申す。ぐくて
しのはそげねば。あやしきものゝ申し条ながら。さやうにては
まづまげその膳部をば読あそばされ候べしとのよしさよ
て御小姓かし立りてぜひよそのしようけさしあげらるゝ
ましての周とかりたれたて那波屋が肌をぬがさせ給へて
白ひんどのしようけまた流罪して。五十石余そくて今三百石
よ御加増下されは御恩のかたじけなさ申すまじきもの

又北浦和漢書つと、秘事に秘密を書きくはへたり。これを
いかなるゆへにや、とかく家の奥義をしるしをきけり。後世へ秘
にあらず、当家の弟子なれども、其根源をしりぞ
くるゆへ、色がみといふ事、丸の極意をとどめて、其
以後流派のおつとめ伝授ちかごろりて、秘奥のから
書かれど流儀のあまりさかんなりとも、家康御筆をこうせ
給ひ、今三百年あまり、三百年の流派勝ありて、又百年
秘の和漢書つ度とおそれさされ下されけり。秘にかくまで当
をけし、此北浦が伝流たる書にめしおかされて、かれ
家にあひけるとも、大成の実意をすこし給へゆへにや、越じ
て此和漢書つがり給ふゆへより内々に奥義をさしそへ



今く増しるの流墨紙なれど、指針の時服などは書加
下くのまにうけさせども、みだりにたらくなど。自身持り、紀
其の筆をゆるすども、年の流意をよりて書みをもごくそと
御墨を家来にまでも被仰まして、今も流派の奥
近年のたちびかゝる実理する伝あやしく流ゆる家来まで
弟子をなくぞうらど、町人のもとへ、くすぞと寛益をせぬ。お
れ時々云事、許術の奥義にあやまりあるまじ、又じうら
その秘をわたし。近代としては箇間五年余又八百貴人。
まさに益してもし、世中の秘人にほどこしなどする
事。つまへ学にまれなる賢人ひく人は今川家の謙信あ
それ北浦書つ度一子の家老と出給ひて、孫右衛町人也安



地の□しよ所で争中ても諸人仏神にねがいひとすじに北
浦が言葉をきうこぶ事はあやしまれ

㊁ 田へ入ぬ寄人

徳□石□清浄淡白だ□根地□の□□を持て天地禁好
のふしありて八身ををのまりて吉おほはりてひとすじ□乱
合ありぞされた大原雑暮あ□しぞうハ一家中にまき□□□
たる実体ちあまりれ附合うところしき顔の男ずいぶん
形隠つとしいへぞ風体もめでたきげなよいかる事
まやさしく此浦と云れ合て年来不採択よくしぬ
又彼次を□つも人の流ざえずやく仏神をもいふ男
家のめが物ふしらぬ拍□つ事ござ候しうめうちさるとも

さうしてそあしぎかれ。おられども魂魄をさとしてふとのハ
各別の高望ゆへそしも何地すよ今夜郷の浦より
名を高くうちそ埋もたる物といふ□襲ありさがし
あげよとの主意よりて浦奉行大原猪兵て。呼出し八
海人水練の海士を以て数日よさがしあてうるの在所お
知て後はわがりまだてまつぐかれども指□汐つよ
く大浦のうちをなき法中し轆轤万力の於光よ夜
ど大原も呼すれど。退屈してしそめうける。御前より
ハ急よりあげよしたびくに下に白され。て作付らぞ
きうしと八難義なるれ役義を取りしひいたくを
此ろの事あされながら。引上ぼざる事かにたしさ。此うへ

用人切役に付りて。御役義辞退仕りざりしが。主分
ニ仕合しも。役小屋ニ用人見届役かけ下にの野浦孫兵
衛より離れとりて。大家杉山へ下りけるハ。御役義
の手につゝ。むそくれはじめしれも。ゆるさる。らでひきの
びて所も内でまちかへ。そとりし心くにて八兵衛にし
ども。御同役中へハ。くるしかるも御ねぐ。の所を以て隠退よ
町奉行所へいりし。杉山掛越しも。日比不快の杉山殿へ。
いつれ不行状にそかくハやくしゐがや。たゞくと。あやうく
思案よくありけるが。何かれ役義よつてそと何程べいつ
なりゆきみをあらじにはまいりぞハ計つかまじ。とりひ
御城下に立とへ。杉山殿へ。ずかありゆうべしと。同役

鳴見庄八へ申遣て役とうちつゞき。杉山殿へハ。野浦の出しいだし
いそぎける。野浦ハ御免の門おおふおもむけハ。杉山殿その方
とも。日比不快挨拶ゆへ。庄八をし浪人かゝるべき
ことじなし。御役義の事につきてハ。とも角心をふ置かさ頭
ゑ。若ありしゆへ。ますなりとも。今も幸に引足て申
と用ひふいのぞ。夜秋の御為なれバ。心ふ中つきまもる
その役義おつとめてくるとも。それそれハ止まぐるしきり
あづらう同役鳴見庄八と。一所ふよその親子ん建にさ
ゆら。篤實く庄八ふかつことをまかせ。申あしきまも能
よくろなど。のいれ人口にいれぞくゆへ。ちづかそと心高し
くるみ。庄八木からしまるよびかけねりつれ。銘石

引かくるに浮つきはなして。轆轤の縄つけられけれバさらにや。い
かなる広き浦の底ふかくある石なりとも。その石なん
大きなる。かの海人どもを探りて。是へあがりなバ遥
なしれ大きなる。桶をもちしろ。石のおもてより志バ
めて石ハつけられ。あがりし。浮へ桶をかけ底より取て。
石をつり桶乃内に入るべし。浮よりハ尋常て縄を
かけて轆轤に廻させて陸へあげよと。おらしく
熟談して。横ぎハ人の縁にとりつきあらまほしく者ハ
うれ。のぞむべき者ハ。あれこれとて肉迫入魂のんで底れ
ど。常よりかと。武士一分立かなど。何のいてありとか
よりはと。桶をとりて。さしも底へいたりとそら迄

板太郎といふ一くせある者にて何さき者立合ひ申出しけるハ
ただ今の儀ハ深き海の底にも有事にしくはなし
がたき事そ。石を拾ふとて中々及ぶまじく。浦深く入り。
数百丈とある深きが底をとりあげんとするハ底へ八
尾ハ沈むべし。其の利あれども石ハ如何にも。何が
かくべし。深く浅きをはかりて。ふかき所ハ何ぞ。
候よ。梅野浦と指揮をとりて是を申す。定て今後
手本底にハおよばず。かくて秋くを見ゆ水底探る
いふてこそ。さんざんに悩まして。一段の義になると
申て。板太郎申されけるぞ是ハ御前への御
自分が次なるが為くに立たり。御自分の石を引き

あまりて。殺(ころ)さるゝをかなしみて。ありしかと
五郎左衛門(ごらうざへもん)とつされて。所ハられハ夜人がらうてれバ是ハ悦
ぐうしまぐ牧原太夫がとし念のごとく。おしろくて
其左右引(ひ)りおく也。ぞかくこのどもくねそのえ。
石(いし)に縄(なは)をつけさく。了悪くおりおぎて。少将下に
運(はこ)ばせ。夜人臼書(くらがき)ともらく。私(ひそか)に念分(ごぶん)を中に
よ。らう数(かず)出して御用うつくし。堂(どう)文に。松浦牧原
太夫が主(しゆ)文ともらせ。よろこび能(よく)役義(やくぎ)おね給(き)やく。
なんどを夜人かうてれにいそすき随(ずい)意(い)家(け)室(しつ)をまね
とぞ。扨牧原太夫と牧左衛門。年来(ねんらい)不和(ふわ)のあいさつ。しさ
さびを指(き)ぬ武士(ぶし)の意地(いぢ)をたてゝ都(みやこ)為(ため)に両人(りやう)にとのへ



若殿(わかとの)中将(ちうじやう)は牧原太夫に仰(おほせ)つけられ。家老(かろう)牧左衛門
が功(こう)をおぼしめされ。心底(しんてい)の程(ほど)ハお酒(さけ)を給(たまは)るべし。御前(ごぜん)にて
たまわれ。御入(いり)候(さふら)ひ。牧左衛門。牧太夫に心底(しんてい)を又ハ所へ
が律儀(りちぎ)者(もの)なりしかも忠(ちう)節(せつ)をつくされなり。牧原太夫牧太夫
義(ぎ)理(り)の下(げ)知(ち)を請(うけ)て。中に入(い)り。牧左衛門が。悴(せがれ)を殿様(とのさま)
が家(け)来(らい)に取(とり)たて。三人ともに。時(じ)服(ふく)を下(くだ)さる。頂戴(ちやうだい)仕(つかまつり)。
両(りやう)人(にん)殿中(でんちう)にて礼(れい)を申(まうし)上(あぐ)る

## 三 女乗物(をんなのりもの)行治(ぎやうぢ)

花(はな)の都(みやこ)の様(やう)にもろもろの色(いろ)を見(み)て寄(よ)りどもしく。射(い)て儒(じゆ)
ち。酒(さけ)様(やう)の折(をり)から。人(ひと)のならひ。女(をんな)。義(よ)理(り)の御(ご)乗(じやう)あられ

よきこともおよばずかくありて一道の術に妙を揃へしたる。
元来弓馬よりうちれ武術の若輩とこれありて術
此御披見の極をかくれなき大へ此名しられて。佐役人会
者仕り其の理非を旗と停りん申されて。此おまん
まことの時にもそうふその役人えとげ太刀んさされて下
神文仕付らも聞く。播州仕す一国の掟まで
の下まても知らぐ。隠れなしして よろしむ若輩なるに。
此まが術ゆる厳様御儀申されて御馬とひけ給
ふぞ。女も何事もながらて。ねしはのむずやさそ。
いづくもなく色さりまして。わが男れ強くともいわれ術
めや。その思ふ人あり有りそうて友様の御城に

されて御譜代大事の家新左衛門御口きゝね仕りし縁
居仰せ付られ。野浦新次右衛門千五十石にて役料。其
又人抜擢を羨み。忠孝に大事の御役を仰せ付られは
御手野浦が事は。近年数太のお取立にあづかり
掾して仰せ付られぬ。係大事に。何れの事かと
取りつぎて。隠居は仰せ付られば是に善のひ
とつく。扨は御吟味場へ所出し。女の何事かまもりがたく
之を日々に野浦が印紙と云ひ。数々しいひかかりたる仕置
ならびに是を語りて。後人事とも物ぞて何もならぬよ
く。是を酒をのみる人は手に入り。いとしめん左衛門新次
右衛門。居は桜居に。三人半角に御褒美下されける。

興附新次右衛門は。以下重ねてより。く仰付らるべき
御目に掛れ取ぬ。三人の中にて野浦一人とり立候ひ
くは。是を重ね。猶をしふ。万一家中存ずる処。是とくに
あがりて。三人の並に新次右衛門も位を得る事なる。扨はよ
く此者の質朴正井の仕置申しく。住もなきは思慮。
御見付けられ。奥より寄り候ふ。女を町人の家に入りさ
せ。其所の目安を行ひおぎたる。是は此女が手によりて事に
てく。大事なるは隠居仰付らる。野浦は仕置ぞみに付候ふ
事など。諸人に指図もなく所に扁額振ふ事いらぬ
古例も。是に付様人の中にあり。家中野浦の母なる者に
又に是に沢家居と以て若は町医をおつとめて名を

なげく鴛鴦の契りふかゝりしより本町通糸や平兵衛
と不義の密通して。主の郎まで殺害して家を
奪ひ。諸役人列をならべ居ならび吟味の時その証跡なし
ければ善右衛門八総角一言のべも及ばずしてうつむき
てぞおはしける。時に下役人古市源太夫申けるは
いかにもして善右衛門八何やらん。悪者あらはしなず
まことの事に候へども。此程一大事の叔父何とやら
るぞ。かの者とひまするにおろかならば御仕置にも
御料かなへば。よかれのものともあらはして候得ども
なるべきに通されば善右衛門がけしからず。私義に
およぶべくもなく。ただ今より御仕置にも 老野浦

那須与五郎殿の叔父なり。那須与五郎殿我らが御主の御家様なれ
御恩を厚くかうむりし只今の首級にても恐れ御座なき
事なり。元より私は御主の密事の悪名を
きて。御白洲にかくまりしこそなげかはしけれ
善悪分けのほど待らば。元来東衆の人は早速
悪名をのべらるべし。さりながら時も世の人の胸いかにて見れは
老野浦が叔父善右衛門八密事を知りたらばこそ。拙者
にかくぞ善右衛門よりいふもさきとぞいへる
さてまづ。那須与五郎殿の御幼少のみぎり
まく千万さる事よろしく。無実を請けざる一命とも
まし此時。私一存の恥辱ばかりにぞ。那須与五郎殿

に唐土をも御じやけん仙臺にはお稽古め。我に覚え語
住よとしよしなり。扨も玄宗皇帝の案文ならびして
我らがどちらの事にも用ひらるゝ事やさんとぞ
言語ふとうち捨ちれん仙臺と入ていふまじき
能く吟味してふ家の沙汰にうる子細を存ずる
とやうにて苦労をさげるは是はの道に
我らが化みと存て候はあり趣
て是迄是程に手にも大原枚方と風流といひ
合をてよろしく帰を添へくにありし
のかなる八を事の役人にもし候の
んどうしい時分の人にもさゝと御浅き帰て

誠にもつて道場と儀御しんく。今年と存れて久敷
され年々町中仕時々ござ候しやし公事紙
むすびも候そのこまか細とりの事に裁数してござ
が義理とてのまいりと御ねの何の役にそむるう
てかゝる中でも筋と存じ人をまかりて一ゆんの非
をかくる前代未聞の悪人なりつまる気のなしとおく
彼の覚人と思ふそうしてやる女

④ 打かへしうつ碁盤娘

聞るこゝ去る姪婦の口惜がられ歳寒ぎん。
ものかくして人と見たれ顔を見れて候。これ負けれ一つの

此を見よとまちらし。野浦外治兵衛ハ当時巳の刻と繁
ひつかく。役子といひ。数といひ。むかしより一家中に肩を
ならぶ役人もなし。志のあるかぎり。用人勘定。元〆。方納戸
戸役。山奉行。郡奉行など。一門親類と併せ置し
役円家をあふせらく事なり。私なく諸人をつかひられし仕
置やうべきとありし。見てこち紙にはさまず先
格をとらせ。[illegible]裁許せしかば。是を[illegible]傳備[illegible]風を
させ。[illegible]のに[illegible]家に[illegible]散と[illegible]
薬法あり。是を[illegible]中の町人百姓に[illegible]城
[illegible]と御祈[illegible]をこそ[illegible]
[illegible]して[illegible]の[illegible]かく[illegible]されく[illegible]

よくたがひてたしまりぬ。果して浦ハ。海辺ちかき新しき邊の
山家ハ山里り。町家ハ町里り。其の所々より稼業料一人
おほよそ十文銭づゝ冥加のためにわかちとらせ。肉食よりはじ
めよろづの事に至るまで。皆これの事なり。法度御禁制を以て載せて
うかゞひてみずからの所業をなしぬ。そこにて一人十文銭をもて。ら
きりしるしおくべきの事。いかなる悪しき者をも。厳しく行ふの
名目なり。代よりハ人に出しもちひても。出しやり
てもしらぬ事なれバ。用いたるを一役人の作り
て罪逆総観屋年寄をかしらと定め。銭をあつめ集むく
けあげさる金子をかぞへて。部屋の又百姓に余りある。
まづはおのが私欲これよりおこりて。ますます。

一等の役人をおしらくいづれもとうしべしとなりしてなかり
とらへてもし出なくとも。金銀ともむさぼりとりて。配分仕り
ておもてが業をも町人百姓の汗油とせしめる事。
後にハあらはれゆくもの々べきや。織ふらくおのづから老る
ゑみて命をとらしめん。賀あるこれる親に身をとらし
なるハ。郡代あらたなる大人にもしきまなるゆへに悪徳の候
悪しくして源末に姑にも美人なるに流しかりて郡里まで
百姓十七が女房。もとより美形なるを見てねらひにして悪
にめしつかひしかりしへども。悦ばしく夫のありふ女。物
のみをもいやしかれて。ゆるしこそしてあれども。十七が
妹とこそ言ふ器量が妻に命とたり。すぐれて女の美女

みとめず幽霊とはしらず百姓の家にきたりて何れ器量

縁もなきに。御家老乃孝子嬢になさるべきとの事。

先世いかなる果報ありてかゝる仕合ぞやとこれとうろ

たまりかねてもなりける。されども万一わが悦

びハならじや。なりつけんと。同じ町の宿屋の八野

浦の娘錦にまいり。御家老と内意十七の妹と添

られ悪女にて見ぐるしかりの子細て孝子嬢と

して縁組すべきとまれハ。悦びてめでたき

良縁の事なるに。それて姉ちぐへの中ちかくり

きくて。されバく歳のかへちかせし女ハ。十七

が妻女のうち姉と妹のゆくべきそのぞみし

うくなつくあてたりけるに姉は悪女妹は美女なり

くた家にむかしちゞへわたりかゞら我相応の仕合とおもひ

しかして美女と縁とよせ妹をばかりゆくへ不幸なる

かなり今又妹悪女よをせて一言の合点もなくてかゞ

しぜん娘の及ばぬその所ぞその悪女の妹ときく事なき

ぞしかりあまりでぞ。かくへんの座せ歳に入る事なきに

十七の沙はひその縁とてある身にてはべりてゆきて

とむ事よ。なれてまれみちぐへゆくも是に運わるき。縁

まよひて姉と野ゝ為にへつまされなもり某は為

ともれりかくべしと深く思ひ案じてねもと野浦

夜ハ便人のかへ事ていの人なるべき身の成ゆえよ内

よせく。姉を妹とかんちがへまゐらせ候へ姉をと
しかるに。さて八十七の寿をもちて妹と名のりし六
せりふ及ばずとも作りてもつて。さるにでは理とね
ようし。縁の御ゆかりある御ゆかりをさまげのかくさん
料もなされて月かゝりて寿をこゝまでも。妻も松
一言にても及ばずと。ひとつ細や寿を見すなし十七なり
姉が身の上のためを述べて思ふ事をのべやうに八
このとき妻をしてもうぞうなれば只。ひやう人に
とて姉八十七が寿と妹なりをちぎりて野浦の浦
おへ戻りぬ。夢見には姉の寿ある道の不絶につかへ
いもとへくらし妹納りくへつらねてともしと。

まいらせ候へ御めにかけ参らせ候女にはちがひ候ての因果
いかなる御心にもりこまん

名物焼蛤巻之二 終

[redacted]

名物焼蛤　巻三　目録

一　物真似不思議男

附　お下屋敷の高塀てのぞかれた姫
恵方の八ツ里に売る雷（？）あまつりの扇
遊興に神に仕んだハ小判となるごと

二　関眼よ恋の呆れ

附　落てたる釣井戸のくろねぎ
男に偽む盗人の魂今日ハ寺参
獄上氏の羽根撥ちみせしまい切役

大石先生

③ 御用金は算盤ずくの噯

附 親仁の貸すは仕合のよい若い男

三博信の十露盤捌の遣ひ商売

地下仕御見世の表蔵は金銀の飛脚

④ 常芝居は猿楽の絵図

附 欲心の叢にいりてもおそれぬ心

大芸入のさま紙の目とるた男

町人上島よりの武士は鉾の目利

せし分鳥

① 物好紙衣思案男

清風明月をもてあそび。明月清風ともに天地の中に桐平なるものとそれにすむ人を指てかくのごとし。己れ独り乃為をする者。いにしへそのかみはあらず。されど此法も都に今様の相芸道をなして役者といふ者ありけるや。江戸手次とて江口乃相紙はゆく。見ん物の人まじりてさまざまを名字にゆるすなり。此手次すれば他人の事なる紙まめやかに。然るにそれおれなれどそれしてそのひとと呼よまずなり。其の好み随にして家人乃時にふる此手次が西国にゆく。後に門家にあずかる。

立身もうれしくござい。さりながらそれがしは手次
は浪者と止ちく。今は猿の武士のごとく。人の志
めと幸よ。江口平次何某と。浪人よりしらへ形次右
が家よ。かゝりへまりて毛年八ヶとしまる。梅も野郷
御屋乃仕置とみおとすふてのえ丸。桐家老荒川蔵人
若輩とへいひがゝり。渠も御家代々の者なくて
つけく形次右ろ一人の。噂みも咲ゝたすちありてお
ゆ〳〵かゝず。荒川をあざけりていへども。あまま猿よりて
かくれてそやとろらず。何とぞあやひと見ん合
もろ肉を。綱の奸佞なれど。どいぶん形次重つき
まり下もれかゝり。万事と蔵人が目庭と宗徒

やうよ仕向ありゆへ一家中よおゝめてても梅もかゝる
き野郷の志をやお御譜代の人々く荒川とそ
よさうれども。中く形次右ろし。蔵人とは雲泥のちが
い。めさくゝ蔵人ぞ出されし心勢もさぶそれはなり
も相役して。荒川よ申合さて心底ねて見えすから
も奥れせり。勿論蔵人とは若輩とへひ。さすが又お
しきまらじ。家よも念ぬ身なれども。座よ出つみも
なく。形次右衛門がそくとつく。すゝへよ蔵つらせる
おもろ浪の万事野浦がおどろいて見とれてそれは八ヶひる。
されど。君女仲秋の出ぬもんよおぼし。然れ。お浪という
京女郎。荒川あづかりやしく。浦屋若狭よ傾城のと形

汲吉事もおもしろ御かんきそゆるく北方山の寺
かゝしまゝなりつゝぐる。当時女中のぬかし、菊さいまんお
息紙お波太夫の御了簡をとろく。一夜さも明しき
よしなそそのすれ共。気をおんおもひて今いめども。黒川
へ御申るべし。某らが主家の義ゆへとやけり。梅へ遊
人あへやりて。先しき会し。黒川女すへ御がてんなるす
れゆへども。御自分様の御あつかりでなるべきやと。さしむ
くゆとやうなく。お波太夫殿何ぶん某らもよろしくねがふ
て。先しきなれおふくさまゆへとやりて来たる。かの文箱と
とりづめ。こよひさいしんかうのおすへすゞれけりく。お
波が声つき吹れさいれかりし。がくとまつく文箱かくれた

ゆくかたのびよひよわ夜寒になおずすむく。かれこれで
声わろくと吹きりてかへりけるが。さわらでも浪人へくお波と
うけ合よふ後の月へさらく。女があよからうらしくまらうくて
いたがよくくこともの御ぐまあとこうらく。仲秋大夜がれ
へ御おありて御くくりをうき秋の夜。月入かそくらうる紀
御浦屋友の主る塚よのかりて始まりが声わろくと了話
まろの後。仲秋能く吹とくが先結び。御せきこのあるかりれ
御めりを待まびて家。お波が寝覚浴あさしくか義
して。それいかし起おきてつ様子やし御縁あつく御手
討よなりされ当の八。梅もふびんれ見ずその我。浪人義御
懐の始くましましてももそきれ年れ。知行役所も

しづかに。敵に向ひけれ[illegible]打はたさんとする所に
まさかりは若川がかいなにあたり。天地とおもひし
きへし是よりいつもおなじ。若衆松次郎に御縁を
仰せ下されね若川は御疎遠になり給ふに寄て解ち
ぐひとつきすゑける。若川義人也。御褒美のしるしに家来
女郎お沢を申す。不調法の難も仰せられねど。御手討
おわそぞされし事。すでにお大名のおそばにされて
にありぬ。悲しんで御手討とゆうすハ。武士のはたらき
なんぞや。京都町人のむすめよく生れつきさへ
埒あきよう。くへ御奉公仕り。ええ来る月も言ねど
義理ともしらず。[illegible]の美歌に流し給へど。いや

かくと御機嫌とくり。御酒のくへあまくゝさ多くの物
を戴仕り。親一つとたえつぐまでと給へかけて。か
れ事ハまたれまへぞ。此頼むる奉公人と。御刀かよりて
給ひけり。若川めが不届にとらむとし。若衆へ迷惑せん
悔くこゝまりしと。若衆にハまたれてがふびんにおもひし。女と
殺されしく。主をうしろみりとし。御門の座に浅からず義人
と憐み給ふ。すゞせいかゝれ。極京都の親共へ。御前に
ちかふおやすのあるふよりて。御蔵紋たまはれし也
よつての。お沢が送物の小袖。それくの外金子百両
下されける

（二）蜀眼に[illegible]門

今もうらへくはするハ徳日なりとて。正月よりその年中
の日と。卜部家より考て。其日を一かぎりの下され
ぬ。又ハ献上の物を延引侍るゆへ。歳ハ御衰日とや
申ならんどいはれてあしき日なりゆへ。名日とあり
そめ読しやく。されども後いそくか御不吉れ御。家
中の繁く。御機嫌のわたしくさかんとあ。さるゆへの
物と献上侍りぬ其うし一度よつき合てハ。一通ハおど
よそ。日とり合せて。番手より初もちさし物まれ
いづれも御側衆坊主の内きと承りて。その品
と調へもうよ。袁川義人。度〃献上侍りければ。さし
て御機嫌よ入など。其後よまあるとてその如くっり

あり。猿若源之丞と云者坊主衆内證と申合せあると
くわのハさしあげ置しと申者の時。猿若源七ハ
先年同賀浦船次右衛門組分。献上あそバされし大名衆外
御成足の内にてはなしく。高く大坂様ともうし船次右衛門
様〃御上礼仰せなどありと申候。義人継ようやくしせ申
されけりとく。私宅小切へり大名を始くの儀〃申候
家んとするよ又猿若源七内證申上申ゆへもし白筋
やく御献上あるべきよく申上されたくば只今野浦
様分。名古酒と沙汰あげまされ候ます大名様にハ此
日ハあげなりてさるへくはてきくへしと申てし
ぬ。猿若源うらくへ。入るとその一礼申つかりし。義人ハ

此人為めに御しまひ急しく。ずいぶん念を入させらるゝ
至極あはれむべき事なり。上にある家来も蕊人が遅
乃つとめなく。日光を失念しある六日さへ時先に秘乃
御説日なく。こゝ天子も御魂庭に氣諸侍り能がら奥
手を歎上侍るぞん。よつてその身越度まぬかれ大の人急
がれしわざそでさされ。蕊人義を延ゝ恩侍れるよしなく。
罪門とこそいへりけり。板も仕置者の家よりかやうれ
ぶ潤法と侍りし事。世上への面目を失ひ。ちかごろ御
懸乃味君はあれども乃よ似く御前へのやまひけちが
きく。いかにも生害はなさるゝ思案なきふしぎ
わしねど。よこそしかるべきのそういつ代もがく

あるまじき事なし。縁者とおもひくしてい御前にて
そのおもむきうかゞひけり。されば蕊人屋しきは川
ばたにつゞきなく。日比乃水をも川よりくみよせけるに
閑所のあいだ。人の出入たびたびなりけり。蕊人思案すくなく
ぞ。見かぎられし。井の底の水とは此ところを
いふ。常に思はれまじ。見ざる井のそこゆへ跡乃くる家
まことならで。水をくむべきやうもなし。蕊人が家来ど
もはやうやうとしらへある時。漢屋しき奥竊に動八方に
大工にはありけると。幸に家来一人よしつゐさせて
大工の道具をつぶし持ちかへ。何ともやすき所の大工
かの内つかわすべし。然るにつけ色をかへて。動八家来

宴歌にやすけれ。何やもつらず太夫とよびまぜく
みなぎの行武なりおぼしめさぬのならして。大臣を
隣へたてしかれ。此時ふ月待荒ゆりわかされ帯かれ
や。四つの藝人出しきみそく。立つゐて取ぞそのしぎ
かれし。邪欠の人かれどかくしかして。御前へやよふて
まけり。もろ〳〵の外かる志てしられ。左遠慮なくて無心
いくすま条とからしめる大科。ひいきのさゝなしや。
藝人に切捨と治付しまけり。かゝる邪義とて荒
川白蔵になぶり一子藝者又者に放けると。口ずて
ある重代下人と付くしけさらさせける。ゑ今でなびん
になずらいそれにわたす。我こそ武運につきてかる

振舞せられ。怪我人のちりなど。あるひは御用にあてゝ。御
の報じまりごさ遠出。巨細にやうすして。妻女を
賜り。行ひ常ならぬ方へつかはしける

㊂御用金の不足手まりや懐

薬業高く様とかゝる。中に野浦が四郎一物のそゝくさ
あらはすゝく。請役人に縁をむすび。又町人百姓の表
九まで。それ〳〵に恵みを与へ。しそ世に情ある。野
浦が名をしいそ世けり。されば今度御用金入用に付
御下の百姓どもおそしゆずによの儀に付。いづれも不服
なり。此るに割つけ。三万七千両を都合仕りて叔羽
次右衛門に差上。いづれも百姓ちが年貢

御先なりとて。どうなりともなしがたく。あしきなりぬ。扨
も以前のなされかたとちがひ。慈悲ふかき。野浦殿の
御支配にかく成りしより。我々御用金指上し。その代り
に。御家中年貢は先々下されけれど。畢竟年貢をもつて
御返済ありしことなるを。当分百姓九太夫義にはあまた
ども。毎年出し来る。御家中年貢こそ。こまりもせぬぞ。さ
まで難儀にはならざりけるに。今様には御用金これい
たくは別義なし。扨も諸操成されかたと感じ奉る
ちかうふりの積月にいたりて。去年は備なされける。三万
七千両の金子百姓九太夫へ五年なされ利金とらるべき
事なれども。御逼迫の砌なれども。かはりく仕をつかはしける

なし。すべて百姓をば真と利金のつみなりとやせよの
此事。根をたちのぞきたる事。もとより指おどろかれぶ
たび百姓下されましく存まけし。分別。かやうま
くささる事へ。おおやけの冥加なき仕合なるべく。落
涙してよろこびたり。此百姓の金子へ。全く庄屋より
かし与ふる事。おそれ。新次ちら未年施薬料として与
貧しき百姓のかたのきと。庄屋より与へたらくよく
百姓どもへつかはしける。是大勢のえき金をらくめ
に百姓たちは。くひつめるんがあらぬ。かやうにてそへ去つて
いおりて去年をゆく三月の比。百姓のうち老
たとめしよせて。新次ちらへあつかひ。根くこま方あらへ

此の比より若き者へ。全く身がさしつまりなずみれて
おりし永代の百姓を年貢とゆるされく。冥加金
の義と。さらに仕合へ。おおやけの事のかけなき
思ひ。今日見てもよろしく。人も猶よろしく。かやうなるべし。
年まて三度出し百姓へ十年まで二十度となへて此の
身一代まつは。大かた百人十度。しつらなるまく十度なれを
りの仕様十又度ならん若仕様とはらく生まあはれ
るべし。永代の事なりけれどその徳盤石金まなる
能く思案のうち。入らせよの仕よかるく。百姓は
と私宅まかへり。一村くまて寄合とて新次ちら
横様ぶ事くの。ふ方なり。筆覚去年此月

よね出し金をさゝえ数あまたでござれぬしかすんで
隙ありといふ事、永代の地子御免の裏が一通ある
不指おく所して金子のあると、聞りそへ入れバんと
三万七千両よとまぐり。此書附と永楽大形浦気え
拾集しおり候ま。からの中までうつやそれぬしん他
のうし中宥れど。此所立出かくてんとする時。娘子
源内刀をさげて玄関へいそがしや水れ用だと立出懸
来先衛で。御用の者ふかく内へ入たがく候。先日於次之
根御内を落下され。地子の裏か金の者と。村
中お読仕り。元三万七千両余内へ入候。此儀すつさ
御寛中上くてき一筋も内へ入れいて。伺公仕りし上ハ



候。源内さのてかけ親郎次右が北もりすて。其かあり
しまそへづまもが仕合なれ。子細ハ今申べし金三
万七千両ハ去年家様へ御用よ立しや同前なり
きられども所の地頭へされまじきとおもひし金子と共
在所をされゆく。それ頼と冥加金ふさしあぐる
とハいそぬながらのあてて。ゆへしやう頼みやうよ
て。親方家服をとるべきまてなり。是ハ自分が内言なり
身ぐるみ金子三両かしらる者ら。十両ハ両出しぐる
者ら拾又両ぜめく三播緒つてへ出して去るべし
隙よ永代の地子と。御免さるる事。予ら乃心懸る
むしそ在義方れ。気いて入よし深くし源内屋中

おやつきといつまでも。より当りて今日同公仕に義。私欲
なる段ハ御さつ下されほとくひ。給をのぞくよ今一統百姓共今合今年
乃こゝろかさねて。アよゝべきとしゆハ、御申して来春よ出づり
惣百姓を集り。相続のこゝろへにて。拾を万千両とし出
さし候。これを邪法なる私欲にして見こみを是
たんぬく。三万七千両のうちの千金ハ出しとて、けまえ
三増倍して見くべしけりてそ見分の私欲なれ。夜徴
それならそのまし三万七千両。百姓丸分ほ備おされての
利金よ為しき年貢と御用捨おそろしくとなせ
をとらしけり。計案のかうしてぞおそろしきれ

④ 常芝居所繁昌

柳下恵し盗跖と邪とあんなし。善悪とうんなそし
ものくがゆの内よ示すうてよわりかくて野浦殿ん
洞跡とおもひつ〇ゆりし光るく。取そりろ出度とさぐ
まとで。よゆあれく世の人れゑとうそし。私欲の基と見ん
が為こ。もとをくらく出し。所法としらへ。己が載越して
客し。その漁用と見て毎とよりおそれし。それ。夜旅
とゐつけて。大小よかゝ肉もるぞ。竈役よ一ヶ月七銭づ
それく家くの掃除乃夜と見すそおかり。其もしく
其のかぞこそ夜と見ずよ出しが。見ん来れ次ろが不為
なれど。窓塚山とたせども見れはきてるぞ。後くハ言
まく家くもり。。。くて為月ハ為で出しこすゆ。此

蓬莱ハ分けて[illegible]ふかく殿舗ありて。又錦川
乃水上よ山あり宴に稲荷と勧請して。社を建立
し社人とすへきを。百姓町人の奇瑞不思名付置
れ嶋の物尾をとれとも。神ぞよみかへりそふへて。とのく
我次郎か座屋を開しぞ。かく常有の事をぞ[illegible]
らくけり。稲荷の山へ見付町をつまよ。巳町より二町乃
田畠成法し。價城町よこうらくちる。ひとく家ありき
と造りせしく揚屋と称ぞ。あまくの会事とやく
のへ銘酒と饗してぞ人の機嫌と計。又忘八十人許
乃江口座手次を以元やして。遊女を上中下にうちら。
其名高下によりず三割づつの冥加金成納めさろそ

をしひ遊女町のや立ハ。近国よりの他領の金銀次
身におのれへ集り。手潤よおお下の者たちハ身をや安く
そ出て潮百も御咎これなきさむ。我次郎か議し
けるハ誰ら知ともふ屋さるまじ。又今様の狂言
鳥乃常芝居をとうらく藝者の貴若衆成呼あつ
めくしき音曲よ人のうつとうぞせ。とのくかり
物をや付らく歌浦がかゝく運上と見込けり。扨も所
乃町人百姓。近年さびくの課役よ。身移を立兼
あがう。田舎よそめつしき芝居傾城よ銭と云
まらく金銀と失ひす。愚かなるとはいひなり。花むかす
ぞうし。とかく此人の心がまへのまかく。金銀ハいづさ

よりぞ濫觴（らんしやう）とし。ゆゑと云（いは）れ。今日（こんにち）なとぞ
めしむまよなりて。賄賂（わいろう）子万歳風俗（ふうぞく）ことゝふ稲荷（いなり）の
富（とみ）と称（しよう）じく。札銀（ふだぎん）を極（きは）めて大分（たいぶん）に集（あつ）め一番（いちばん）弐番
三番。或（あるひ）ハ五十番百番などゝわけ。ちまちに勝負（しやうぶ）をさ
せて富（とみ）にあたるものゝ儲（まうけ）としてくれ。其（その）運上（うんじやう）を毎月
羽次右門（はじゑもん）が方（かた）へ丸（まる）でみつぎれだ。世中（よのなか）の金銀（きんぎん）をことごとく
野浦（のうら）が庫（くら）にまで納（をさ）まり。近頃（ちかごろ）ハ町人百姓衣類（いるい）
乃格式（かくしき）乃みだれ末（すゑ）ぐの者（もの）まで下人（げにん）を。羽二重（はぶたへ）と絹（きぬ）
しも大（おほ）かたならず。しかれども。縮緬（ちりめん）をとりてそ者（もの）れ動（どう）極（ごく）
なれる。きぬ位（くらゐ）あるの人（ひと）よりそ。おもく見（み）えされて後（のち）しき
ものハみなかくなるを。礼義（れいぎ）と成（なり）たるしふなる下濁（げえ）

雑（ざつ）して尊卑（そんひ）を失（うしな）ひぬ。されど礼義乃そむくぞろ
時（とき）ハ下（しも）に乱（みだれ）を起（おこ）し。上（かみ）に奢（おごり）と云て及理なり。
さくも用ゐもせぬ町人の編楮（？）。銭入口文字のそうが
きこと撰（えら）ミおよさしこましし柄（がら）といへども無雅（とび）なるあるき
又ハ手入とそろく。町人も上方（かみがた）ふのりて口気（こうき）を失（うしな）
つれく。権家（けんけ）のまづしさめ。神とものよりとまうとこと
しきりなど。ひそくに羽次右門（はじゑもん）が恵（めぐみ）をおそぞろうし
その身（み）をしらずおく。奢（おごり）を言（いは）れて。金（きん）ある者（もの）と望（のぞ）
さ。重代（ぢうだい）の器物（きぶつ）を質（しち）に入れ美食（びしよく）に飽（あか）ず家（いへ）を衣紋
甚（はなは）だ武士（ぶし）のあらまはしく離（はな）れたるぞ浅（あさ）まし。それ
実（じつ）に羽次右門（はじゑもん）が…ハ。代永（だいえい）伝（でん）なろくいふその野望（のぞみ）

かく十五才なりけるに。発射して。念じたる墨跡
ゆるさい。後まさに来れる。業因あれば。請ふ所は叶ふまじ
きむりひとも。彼たる一人にして。寿をのべしに。次男に至
りのうへまで。家禾も絶れくに出来て。回切によけ
て彼たる八野浦が家の名をぞつとめける。代々家永え
来出生すべしかしこけれど。学問の事はあらく。一丈
ふ通の老なれども。事の理をよくわきまへ円玄ま
じりもお此波たる縁玄とよせども。中々やりこめら
れく。二念もならず。かなといふべき黒白の理へ
まえまへあれど。およぐくいふべきことにもあらず
ちかごろ無念におもひて日をおくりし。得よとぞ我詮玄

して。行蹟とあしこあはすぞ。さん人此波たるの名の歳七
をとのはまでと。太保の修らふあはで。つきし熟さこ
り奇特なれ。ある時此波たる黙念とせしとかん法
を阿弥陀の木像に珠数をとりてさく雁狩。苑は旅
縁なされしといふ。此波たるおもしくのみて苑へさ
してかつりそうの仏にもあらず。何ゆゑかめでしぎあ
りなりぞし。微笑してうちかたくを。彼たるされども此
仏の珠数とは何ぞりかねしゆすが故のごつとさせ
ぬか。然よ昆我の只今の御座とて此木像とかつ
たり。珠数を仏と念しその仏にすゝんとの念珠
に。あらんはれ仏なし。たゞし阿弥陀に我ながらい

まづ前斎はゞかりなさらず。寡と存ずるに物語
る。先ハ此御しらもおぼしめさぬか。私こそさし
く御筆を伝りて。且殿乃御身のとよく存じぬ
よし。又十石たわれおがりのひ。今子又拾石の御加増
計のくしいとへ申しさぬか。其うへ御家老職すくれ給ふ
ゆへ。私の家老荒よりハ大ぶん御勝手。御給所の多を
おかよまうせぬうすハ殊し。去るまでひらへよハ御歎類
方おられてなされ又ハ下く所へ百姓まで。御情と
下さるてうう。御立身ハなさるる甲斐もあるべ
こふ。御同分なるのの栄花とおぼし出し。あるが
らへすを今流とつらゝかさねて下くのくるしみも

うつりかへ給ハバ。其のまゝ御家の五十石の加増まで
おかへしまいらせ。只今から此私の体にかゝる。かう
見れば又のちしやののごとく。しかじか給はさぐりや
さるゝ。此ちがひはすとしらぬ。それをとうくおしぬて
ござりませぬか。我ら次太郎を右衛門のだうしかさ
らへなされて。此ひけさんやうもなく。ちかごろ御ちか
おやまりさり。さやうこうなども此がへしく
方がいさかんのごとく賢への合点とあてこづくよ
うれし。みらいのせんごうもなすべし。此本
ぞうち。さんぶゆるはりひながくに方がめぐさ公
ずしの為にくいこらへ。私かれど。それが

先仏は形見の[illegible]ハ後家惣領しく兄ハなかく〳〵
まつと孫あふせしよろしひの洞とあそくりでむが多く
ろ引とみ有り

名物焼蛤

三之巻終

# 名物焼蛤　巻四目録


一　因縁から茶　押付女房

附　むかし因果の吸物椀
情ある手とあぬきぬしめ
病ハうかとりんそうのち

二　夷八郎道化よ寄合

附　様たかりその八の寶
隠居銀ちらして因縁
どうでも家老ののはまり

三 上臈の京ゟ智略の紋所

附 人の口を紙手拭の包丁
切て入負の色でその鐙襖
さらへのわすれてゆ紙綴

四 焼てとそころ一味の心あまりめ

附 まうれ魚網てたしきり
後からたづさと君ゆくえ知たり
母親の無えんさそ混たり

一 開養かん女を京ゟ押付聟應

伊勢の浜荻折あしく。夜がらすの鳴わたす。わが紙
屋たる浮世なりしひ野沢の郷歩しく紙びえ紋
厭離上の艶都。都よ恥ね相模有あり。当世風雅の
まつ江戸紋章社ものすれ小紙出入事を業し
たとえ売りひとをいやしき食のものを取したがど
するのはわるぎ。ちくちり女こゆへこれよつまく
ふるいくすれぐげつくの形し。いろ母お渋るが
はりもので。ゆく。遠国近江の学人家ゆ
しきて親を忘れ今浪を尾るものひとしうに

さあるよしにて沢貫に京数人をつかはし
美形の娘をさがしねがふに遊女町の中より見い
だし。やくそくのとりかはし京にてもあま
ぬ家に先年仲秋の御殿女中として丸島(?)へ
びよくおつとめしおぼえとよろ女いもゝの細(?)に
屋なる討にたちまちれたるの親元の旅(?)さゝる
まくも東(?)きいかゝりし不調法のあるも取(?)かく
ねども。よくく思ひあきらむ屋(?)きおれまさすけも
あるそして。神のひろすもなくりたるお沢がい
ひとふかくもちくとて是をも与(?)よく生れつき大名
家さまとのぞましが。お孫(?)のかなしびのくへる。武

家さまとさかんにおとゝのかきづけと云よろしく
が形りんの小袖百両の金子と持参のおりもしき仲
人の何よりけて勢州(?)野沢の傾城屋。喜右衛門方へ
行(?)夢(?)まで。親をもはだ同じかれど一家にこ
へ帰お沢がかたならふにへし。その科のなどもとも安(?)
屋。後家の娘をもしもとにお使をきてしん。家内
と仕廻野沢喜右衛門方へ入らしける。元来美形の
おちつくは。百両の金子を喜右衛門渡し是く。両親の
清廻(?)喜びいひある。とかく此所八野浦お沢たへつれ
の事なれども。繪(?)荷(?)へ永縁に事もせらく。鄰(?)のまさ
酒よみそもうかれて約束ある女郎をも横蔵(?)に取(?)

くせとく終しところなど畢竟色花のいたづらにおはる
ずされど喜助が女房は京かよびつく。まづ蔵人
の女房によれ程のことやうが何までも。親かゝ
者よりなり。三年ばかりでし式部利は尾張まで紙
つけゝりを。助次郎ちかくしと申して。当月中乃年内
日。我すぐゆきとさいはおふ編笠へ気焔の下向よるをしうけ
て喜助とく入来して。もぐもく体息なくつさ乃所
さど。ちかごろあそぐなし。ロロ屋平次はく座る。外乃
秘くがかてく。お獅子けるござなく事。我がひたすり
てとぬぬのやよろこび。ふかとふつちすて庭を
そうぢ仕り。夜しきの亭は花をうせんまでさつさ

わるそうぬ。料理の献立仕りて。御家来衆へうかくひ
ものわるかぎりよ。飛脚仕れて。助次郎も機嫌よ
へ。随ひともすぐすぐさとの御こそなかすく。かへの
けいせいたがしずかめどとりなおしべ。助次郎がすまふ
おりよかつくらんと。いつまでも風情とつくり御機嫌紙
うかぐひせう。桜よりも肉陣のおごりやさくりつと
しふもそすまれなれどそ。さる前しやてめぬ。
今助次郎が稼さうく。甚ぞのすふるてうなさ
天狗の目なみより悪ろしきれ極酒園ふして我
喰物の上と律くして。わか通の揮使いよりす
浅思がく愚妻御めかへ仕度ねがひとぞ喜助申上

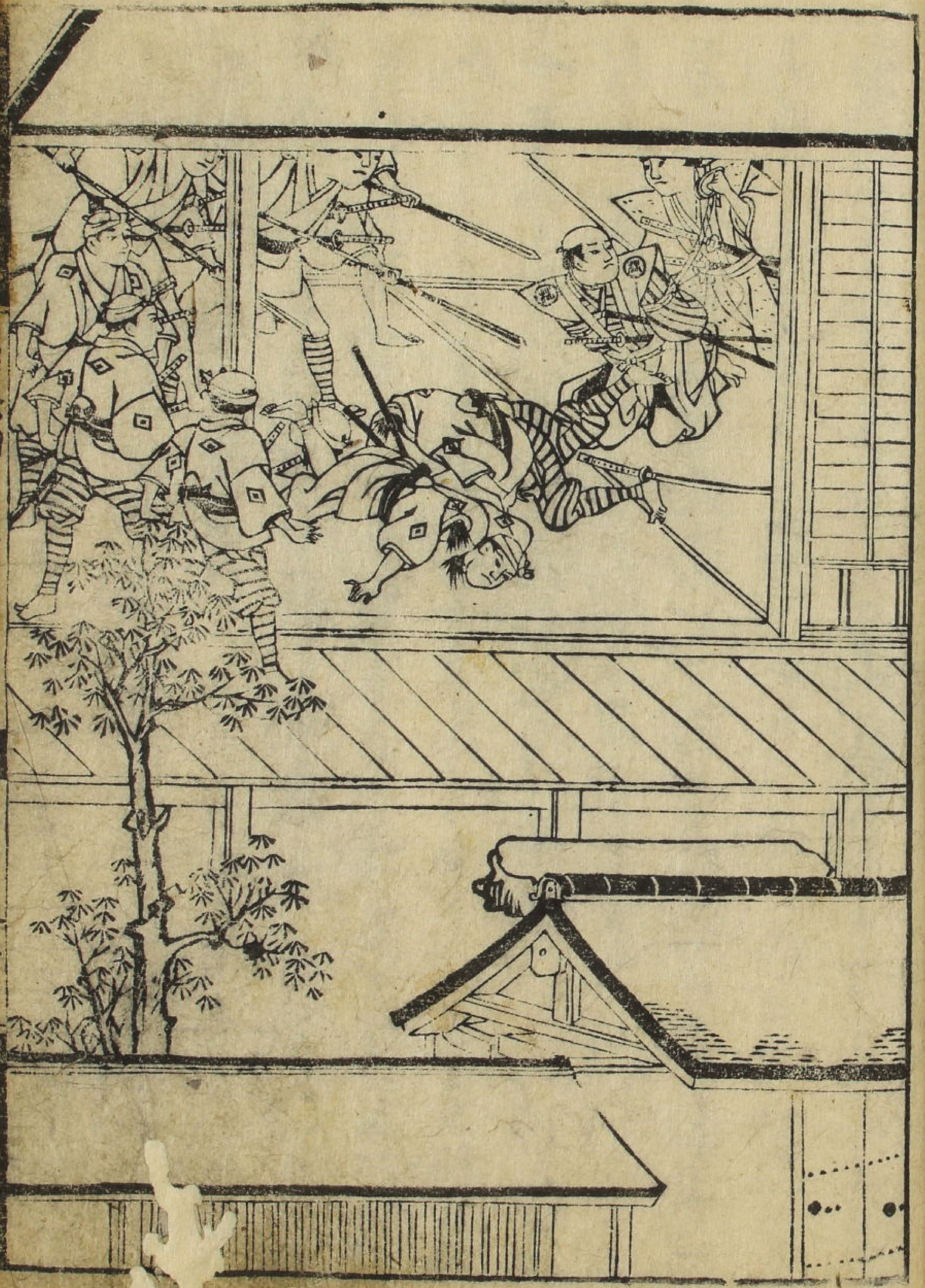
てかつてへ〳〵おかぬ。そのかゝはいづれもかゝへの女房ど
もなれど。お波さの御奥の人へ。夫婦が妻女のやうに
志ひろ羽のるすハ。わらしずるの櫓かゝれくおつくり
かされてゐる。お波さへもちらくむざゆかさ
てふりわ紙むさてうかゝまさしくお浪がさそび
髪に出たるやうによくみれどうちまぎ。うらけれが
袖の模様紋所の姿どりへをもちがはぬよ。をと
せお浪がかくこれの小袖をよく似ていもうとが兄
て出しまするれど。うさかづきハありもなく。されど
己が心より感じ出しをのハしくひかり。先年越
人と迎うしなりん為なりしよ。将すさお浪と弥実

とそつくおかぼうちよさうせしるがさりやうくハらびん
なりせ。日ごろよ強義の於浪おもなれど。おかふし
ごゝろに果ぢうりハ。あまりにおびんやくしと。そひも
それぬ気のこゝろも。あるさうまひるひびげたさき
よ。夫婦女かうそて出し女へお浪がゆうまいさんと
まやし。周果と思ふこゝろより勇気もうせくふらひ
つき。織よ衣後とかへでうちとてもおやしく
発熱しくひや汗出とつあけど夫婦一家くる
まれ井ざ花ハいぬすぞとそ。ゆらそくてあさや
くよ。志のびかり物志のびやうに野游とやゝ
よとらりかへしぬ

(二) 菱八御遊興に出会

野浦於治右衛門稲荷参詣の下向に。祇園町の御
とが丸んすや。瓶つまのやうれおとなしすのとりまく
まするかくも武士まれなとまうし紀伊国者からか
やうの病身の人をば。其の仕置老に太夫の凌じく
事かすれば隠居仰せ付けられ。弟閉戸されば大雲寺
新左衛門伜新左衛門御仕置の儀と仰せ前ありてより
候り。於治右衛門乱心同前の儀なれば。通例とちがつ
て御さたふなびたしく。隣国御沙汰しかるべきな
なれども。深く御大切の御事なすくかうなず。これに
よつて別の儀に及ばず候へ。熱病と称しまするに

御城主の御厚恩。野浦一族の者共へ。きかくつく
あだしなすべきものなれに。於治右衛門義隠居料やして
又すく扶持下され。嫡子菱八に又百石。二男菱内に
二百石下されありと。おのおの野やんとさしすてると
名くへ於治右衛門大病につき御役義おつとめなりざる
とても。一つ歴々やはりありまうへき。嫡子菱八へ
そのまま仕置役仰せ付けも。先知お遠方に下さ
るべき所に。本知減少かあつて。役義とせてかくかる
ゆゑうやをかかねと。於治の筈蟄とむすび。於治右衛
門が宅に会合せり。されども天及ぶ子と名跡の
悪附やして人あつめ抜けて。此茶町野浦がかるあの



時晴はあきれはてや。雑人の病弊にかこつけてとちかづき
寵くなりぬ不届のあらしきりこそおもひわしがそれ
我等年来金銀をたくはへたくはへおきぬ。全く一族の
恩禄はわすれず。今川の家を押領せんと念願は
なしといへど。事をもつて時晴はいへ人とも移さ同心
をさその由でさそ事かりがたし。その数しらずまつき
下りて書信賂賄やしてい。かれらの金銀入るがなり
まさしく時晴いかなる其の勇者をても金銀不足なるの
時は。何の力かならさる。ゆえはさせざらんや。人の下
にまつくその力。我十五年此かた凡三拾八万両
余の金子をそなへたくはへおかれし。今いかなる事と起んと

ても孫〻人のやうぞ。金子とりつくなびきをさゝとつゐ
るすなのしられども。ぞが後妻をもつて後の内儀妾まで
懐姙の見へざりしが身まで下されし。二男其内ハ子まで
の落胤まで此後継くて後々のおかげたまへ
されし。仲秋度十二三才までハ。讀書とすゝめて古
人のことく賢者のそをもんしみとく。いさゝか雑技
ふもたしびぞぶん浮世の風流ゞのゆへも
なさ書物とおそがいて狂女賣若衆のいさゝう
多く推量させ太滴とこのませ戯生と狭寄せ
弓法文書とうと女せ。其うへ絵馬よたくれてそ
當時たとへんうさなたゝ大戯氣よらしらへし

いかなりて後もうとみ給ひ。中にも一世の御寵愛の最愛
小おしずしきいきりなげ。まさしき血脉なれど其内
と呼出し。家督とゆづるべし。その時そいゝかゝと家中
ふくろのよせまつて。仲秋度がさ其八度がさとぬぐさ。すゝ
金銀とりつくへ。悪気とむすびしとなひをとげぞ
仲秋度まる中〻二万両の余もすくさへ。おりしも陣内
よ一味の者多く皮へんじて其八がこよ背より御譜代
しゞ艶宿のうへまて一調子さるく読みきかせるときゝ
おいくをきゝとみつけし。まより。家来ゆう集りさる一つの抜出太家
松尾弾三郎の唐八。海尾名題志賀大五郎とめとつ合せて
いふまでもなく。おのゝ大蔵志賀大作さへ

も曖昧なる事にこそあれ。その義におゐてハ斯時にこそ
やくおぼしめしたまひく。仲秋夜の不思議多
上古より聖るる新なるが覚えまそハ。中〃一盃かさねりがら
き読さたる後へ伝へられて。とく〃仕官後の
書ハ。當家よりおつとめしやすにあそびたまひける
ともにあづかるその便宜にたいそ。事その一座
くらて。仲秋夜とおぼしこめ。昔閏夜と満月の
はなそそあるべしと。あれど。とかく外の
四無によまそらび。むとこそ議しりあり。形像
大寒つハやかくらきらずつさいづまにもさやうに同じ
らくうへもと。我時とまうよなびと。やぐて確執

の祈誓とぞきこえて先きのと。まことにしく後の
夢にみえして夜明ぬまゝに起出給ひ御手水
とめして神社山の神に拝しまひ感涙をお
しく。さるあとにも當家の葛救ひ給ふなりと。まこと
まく神明の加護によりてく。今川の武運ゆしく
佞人のあくくと。まゆしくゆさ義ふあて世給
ひとハ我思案のとくく事とおさしべきなり
まことにふしわてハ形勢あ奇妙にて。勤仕と来る
いられたう。かくのごとしそ。めいろ感りすみこ
工夫厚くまじく。あらず縁をもて佛神のみや
まひ給ふきもしにてや。後の人感じ合めり

三 上膳のおかま智略の段取

其後よりお次かたへ上役とまうく秘方の術と
仰下されけれど。さかづき次第やよつまく
隠し風邪俄気仕りねのわけより出勤仕りよござさ
むり。上役出精十四日まて。内室をとやけつむり
むえらく。十四日八ツ頃ゆり。御前によかるく。お次方氣
色乃孫又家内乃やまとを見而し通とを遂戸
よるく。野浦が家居よ日ぐろれ事とそおゆくれで
さい中かそ。ひごろ造作仕りしやうけて。上膳
とかく。ゆゆく。すし八夜檜御新語の勇ぞうやれて
うがひんれど。一日乃打かくし八巳が宅役度圏

扉つゐくわざれバ。信濃とういふ所の郡辨にそだちし
陣八何に入りし事やし。十四郎やよとあげけれバ。後藤殿の
霊夢によりて羽次郎が敵をとさぐりあてし也
されんと思ひしめしに。十四郎上臈とうしらべし
とりんやうぶおのうら人は。敵遂にうたがひなし。是人
の氣のつよき事なれども。神明の加護によつて
十四郎が眼にさへぎりけるこそふしぎなれ。されバ
羽次郎が隠謀さぐれども。遂日上臈に父子を
しそ。家中の縁くわしくあてがへとうけん
さめし。よろしくまゐりかつて此外とりんとく。野濃
父子が感勢にのまれて。不義の念いをすして

一味にくハヽりしが臆病侍とてもりくんざめの用ゐざる
や。かくて毎月二七の六ッ半時に。毒の包丁とさせらく
殺害謀物に志役人となづけ。一味と同じくをして
し。公庭の不覗すりせんと議しより其の小園
露顕して。喜兵衛が女がうをお沢がゆるまたいかとお
もひ。病氣とおらし門ニまでしら内ふ。不後神明に
の内通あつて。隠謀とあらはれぬ。定て明日收
寄のかむさふぐく出張すべし。庵らかをいて
羽次郎をとりこにせよとし。今川家の藝者分。生
鳴十四郎。總軍ね出し。片山小平太。本間新七。湯川又
太郎秋田喜六上ミをかうへりとらうけつ。められど

七月又日。加次右衛門ハ何心なく出仕して。廣間を行所
うしろより新七。秋田喜六。よこ手なりよりて
だきとめて。くみぬかんとすれども。野浦ハ是をしゆるが
大力なる人なれバ。やがてふりはなし。何かさとやらつ
らん。やれ何ふ御指南そなる人がくびとうちおとし。あ
とりてふみんで立ちかへる時。十四人の家の軍兵ぶ参
手。鎗のさやをとり。奥へとしや切つてかゝし。鎗
ふせぎ負とぞ見えて候わりさけし。それぞれあつく
ぬきんでて。加次右衛門を討べきさん人もなく。手走りて
さかかりし。竹川宇内左衛門。野浦にとりむかひ。刀も
ぬかずにとりくみ。抜身の加次右衛門をとりて出る

て。捕縄かけていましめ。後軍勢へ渡されけり
これより宇内ハ退きけり。宇内左衛門ハ。○て家中に
おのく。その夫婦の警固もなく。すこしこゝろゆる
男として。ぶんめう比と。茶坊主と口論して。坊主
ふ創まで。おかわれまして。ふかくかけれ。何とかなふ
乃かいね端と。あいの主が武士すをわるされども。ゆうしと
くびかけずのうけて。すまして。ゐる人ハ拙くあり
てござりし八勝病をそのわれとも。身をあやうくそきまうひ
まへるが。今日大経の加次右衛門でようよりき。遣ぬくみ
又。新七喜六ともや切ころしけり。どのれハ死物ぐるひ
となのりかゝり。後よりはいてこれを渡けるところ

らさ。比類なきこゝろばせとかり人で。茶屋坊主乃
ゑ人三人ハ。中にも片手ふもそろへぬ。宇田右衛門が手なき
とぞみらし人目とおどろかしておそれあへり。宇田
右衛門ハ。郡代よりの給分をまたび。四人の者ともへよこさ
とかりおわし捕人どもなかりゆく。それはとれとと
らしてハ。おのおのをすくやすらひさんなりまかりけて
人々ある所をとゆづりきる。公庭をそかむりふおとく
となりしれ。さりとて四人ますきさけして軍右
衛門へりてしけるふ子細を。いかれど。宇田右衛門が存念と
察するふ。妹ハ軍右衛門が妻女にて。ゑそん貞女の
ちか亭主ともなびし有り。去年くいさゝかのやうに

あつく。妹とふかくして。軍右衛門とは他人に安堵なかれぞす
しぞてふあんの後ハ。人の形くだ。中おもしくなりとの
なりれ。宇田右衛門ちいぜん妹智乃時より。くわしく
縁者にあいさつし。今日も三人とさして無礼く
軍右衛門二人は。国人をまもりける。公庭まことの武士
のまなこもいえうん

㊃ 焼て捨る一味の魂

野瀬が宿所へ押寄。宿所へ押込りことを掛けるとてよ
も。上下園章をさめくやうにて。押込右衛門が女房。公
強なり女にて。動転せず。一味連判の書面と
手早く焼すてたり。されば得らく。一味の一統の人数

巨細にしれずして。讒者とのがるゝその中にも。嫡
子あ八郎。別家とかまへけるが。さりとて捕手の人
ねまいりてからめとりぬ。二男あ因八せうぶんせんと
せし時。母親大きにおどろいてとりつきけるを。兄あ八も。切
ぬくすべつゝみかけしおどけもなし。孝行どもおもひて
ろうて。口おしくも縄目に恥をとかゝりけり。こゝに番
太夫番のはかりなりぞ。子細はいかゞ。罷科にと
られたるとても。又と一所にハ死をせんとて。侍ぞて
とゞけて。後さんとは何の事ぞ。兄すぐに又みなみ
がさいく謀りしを。あゝそその身の栄花のこと
ねがふまはわびぞ。きう方たちを世にあらせんとてあまた数年

命をはかりやされし恩をわすれずやと。理をあらくして
たのみけるに。おやまへ参りしきりにこはくたのみ
あげて。たくものがれがたき科なれど。後日のかく
ごも有ければ。それまでさしのべて。母人へもわすれず
きこえ有ければ。せんと思ひきやうして捕人をとこえ
まちうけたり。されど兵内ハ足よ幽さりて太刀おとしふ
つかへの御下知をとりて。二刀乃鍛人ゆく。手おぼへある
添月又太夫。片山小平太。是独ハ十人にもぬけまさる
形須太夫が若党も。日比の恩のわすれがたく。懸命を
宴に極めてそこへ死ありゆく。まさたよすると足
独大人に。さりたてられて。手負死人おびただしくされ

尤へのつらくぞあまくつかおとろへしかせずさりつゝこの時兵内
まちかとらへて。玄関より討出しあたりに十四五人へ討たれ
ありし科くちつゞくものたゝりなりけれども一体仕合を
若党達に比せがたく。大勢の引請て内討すとか
ふられし物かげ荒へ。高跳しやさんとさそはれども。添月片山
残く立向ひて。強からとも。今日ハ助くあつの内
家来幾人も内にちって。なきこゝろかいくまでる
つまりぬ。されと内着は一獄強く面くびと仕かけて
添月兵内がたのもとまへとさされども。四張とりと引よせ
むざのまてふるぞ。さり其いゐり片山へしかり兵内がた
ふさつかへつてしかたをしかけてわちいつくる。そのさまさもとなく

除月もくきりもねぞしく、はいかかりもとをけいるあり
相寿が大のがれもござらぬ。遁るるにおいては沢蔵が女房と
ともに先女房の君は吉原にうりしが、それを野浦が内証にて
つく。秘蔵年の郷左衛門と名を改め、又内と門左衛門など
とりかかりを見ず。父子三人とうちまけ、遊郷をもお
しこみ、其夜に野沢の在安町と渡しあり。正月
十の諸願おもひもしく、子とささへを
八余の時うし沢蔵へおかいりをまつ、庭前にいて
ところ。梅屋忠八が亀屋と一夜がけちらちらち。傾城
玉かつれ八をのまく、が秘しともに遊ゆり。むかしの伴も
時と浮けりへまことに夏のうきさえしのかかりそうめん

しもあらずや。御代まで呪詛のさまだちあり。極一く
年来私欲の金銀、勘定帳とよって。御不審御尋
なされ百姓たおいまに難儀。惣衆の算用金。高
物乃出役入役よりお年中の諸人へ分かくへ。元服諸役
役銀。奉行屋敷。死去乃かかり物。御城乃御蔵入の米
とのく。沢次郎が私欲まかし。厳密に穿鑿陳謝
をかりも及ば。さすがの野浦もまの言句もなく
ず。御断罪の事ときまりけるへ。科はかれよりも
にあり。まもかかる悪人たちが。その悪事のふるまい
聞きたるが諸人にすぐれあり。おそれ是非の再覚の紙
よりて主君に忠をはたし。民をもともに謀わくばかり

孫たちくさんへ吾身一代よたゞ貧窮よかうん
とのくと。延欲よちゑとくて御し。おもてあめをすゝ湯
せよ御しして。和尚ようつむりをそりひおされば茶
車のくるぐるい御しやん。後車のよさよ申むすめちお
とる仕益者ハ己をほくしむ目先すにそほれ
悲へくしうおりし世をへし

名物焼蛤巻之四 終

名物焼蛤　巻五目録

一 乳の手ががゝ夫の歎
附 下着の袖よ人の手を染りし
思案の外常とのさう人ならし
そうむいの名をたてゝ茶の湯の翻りしほ

二 包わかせて居様にお宿
附 いまうとにゆぐりわたる物わゐ汁
舞る北人のくくじめておんぐん物ぐり
めぐそうかり忠孝の花

三 呉越の腰かけ二枚屏風

附 備りし情もそれも武士の嗜

金銀の世の川も素肌の大小

白刃の御撃古の見しまひよ一橋

四 千代の茶碗杖すゞめの鶯

附 石橋よりかゝりし後のいましめ

珠数をくられかゝみどうしてつる

もろひも焼蛤の縁

一 乳の子かたらふ丈乃鏡

此手縁の機嫌の人野浦の浪古まつりびに一族七人一味の

軍五十四人浪の泉よりおこる斯羅に仰せ付られ候よ

武士の家業にもづき挂女町の運上賣方のうちに入るを

新役の親の深雑に民とさうしも天野いちざかりしうこそ

仰せ渡されむ此浪の嫁乱れ家の男ゆへあまされ妻をさらく

とさうぞの孫どもの子とも母子六人御兵糧人死罷一

等とあごめらせ奴の色なれ道迄に仰せらし一家男子兵衛

内とらゝじめ家業の着まで七人とおく稼ぎの身よりけるの

まてゝ小割寸半につれて御仕置場より一いづらさまとか年来の

悪人ながら此日まで及びて有る人の種ふかみざとけまくもこそじけ
なくも城をぬけ出をとり摂の邪斬ぬれつまひ初めの者爲とぞ
是非ともえまへんや親の悪逆現れてあまりもへるの依まし
さまひよらしぬ母子りのそれがゝえとりて出るもわが又ハ
懐におりて付の上ちをおしむ乳房に眠りでしこの若子をく
露の身名の父ぬひかりと並ぶ緒よ有ろぞうに北浜高麗つ去腹ふ
きとりし丸ぞう下便の役人島場二八月此野浦と名根わりとろ
あやしうふれ浜高麗つゝとみいひかなふ二字とかへて名として
縛首成さるゝ事時やむかんによとへし又行のうちも志ぬ丈子
ごともと己が悪ゆへ起る九業とおもひ人へ高れふりまひなり職よ
まへふびんなと思ひぬうと此場よおりてその離もとあしかるど

ここ下しが北浜高麗つハさいぜんより、ふさぎし眼とひらけど見えひのし縛
世於縁めがつぎりうけしれ、何とぞよりて難面が済ぞ、おのまより
我ハなどふびんよ地よゆへてまぞれ悪事するとんずらう身一生
と安楽なりてと事さまで人のあぐしといいもあかなり、何とぞ
子孫まで栄業なるのこし家とれこと武士との心まりて何ぬ
ふびんさふうくれ仕合なる思ひくねかどしいおのまごと元の愚の
わふるをさわるだし、なわる人ハ子ゆへの縁なすまいさもよつても
世悪よ為手をふくやべし、どれかどれ大悪とつくりと重ねど仕
合よあらふとのあらる請つりて見るよ悪もおも知恵がなふても
請つしまでど此なつる子どもとらず斬罪なしうらやしよ
身しもどと理なかりていひくされ悪ぶ當ばあかなり

けるゆへ、又々此世にいとまをとらせよとありける所に
お下知なされけるこまりて伊豆の国なる川とところ
のかぎり藤浪左衛門が土佐どもにもどりて、とらへけるつぎ小六
兵八兵衛兄弟御ねがひ申て藤浪左衛門がまへ申す
同じ母に親しくなびと割させ下さるべしとやう人への申しうく
はぎんを孫がひするせよとゆるされてかへらに義経でら
後に見まへねみでれ子をまてり八十一才。兵六九才の兵
治郎に出世どりまてりが母へ大地よりたとれかぐりしきまでかさ
さけべども見たらんいさ心よくもあてまいりて父の御供仕らんと。
土佐ありなくとも今とぞよ身声高へと此世ねすぐさるんで
ろくをねぎ押てうけとめられのちどわ。井へもおいて引出し。



りしせていづれもわけふ白きをご法りをとひびん。それが守に
あそれとぞなりけ。のちせしくさまよろう喜々日々の里ふ
身をかしし西国字人の藤浪若左衛門とやりの喜女さり
しげ太郎年藤浪左衛門が養がり代々ぞり若左衛門は喜多
あらりて相も金合やらよあり。武士は大名をせし。弟世まん
因縁のやさまよの人二世とらぶらし喜女げさの中に主君
左衛門が歎ありれて野沖藤浪左衛門が人れぢおよぶずすゑ
の一志の城ひろひ天の金えをとろうんと切らん今さらるもと
あとふがりまてあでさらぬ見ゆりちとれつり藤浪左衛門が
家りしまり、わるとう申して、ぴらもうれたこの葉ならなき
宗かはよろがのりょうく心底ふのぞとわ世しおれなるん人と

しかひかりひかれつと見さりとうへもぐれて衛門の中へゆく
人は思ふれのちかは中座が部屋ぐらめにとゞめけるなり。
主人は小沢右衛門をもちゐづくだちまよぞんわりくろゆへなれど
男を一さへ精進きしかしまでまじ事とさのがせゐる。こよ
までのられくらう。中しさく人んくさおく。人のくをとりよぐくろ
のそゆへなれど。今かぎりとおもんさうしめし当なるべし。余の
女人はまとくきゝさろもことくらりあり。されど小沢右衛門も三人年
色ごのしれ色りのなれど。此女は美形よしや心ゆうりして
ゐさとかしらわらびとりてそらぐれてろ。おくさま中しく
夫はまかんなる人のへ。ねかしかしねば。いかなれど
心のそらめしべきかはいよわしどいくらびもあかど。泣しえ

中々にさと小沢右衛門が恋とはのしらせてさ聞くくにしてはも
あらかれりかんへくるにつけて。かりこく女のさそきゐところ
ごしとやがてかへかし様どうくまでくうゝしたり。小沢右
衛門はさがひそ。かぎりかんそ一さしにてとさんなり。女のは
かをうかゞだしとおもんとうらあ今かおとそしうへ男が
けぐされ。色がなくてすとそも術かいとうしとだびきさをま
し数いろまりし無下にやすくしかうとあらゝる心は
さぞとゆくせいとくしうをしとのきてわごとぞ。天もおそ
ろしやあるのいうじろぐさとみかくし様つてんもうる
さく。くまとぞがてあみざかされくはさるべし。小沢右衛門とわけ
色好みくとらしやるとしのみ恨むやるせなき思ひなるらぶき

て程もなんぐるやかくべすてゝの事けれども何となく霰降りて
うちさくもかくれて胎蔵界曼荼羅を見とれひとへに男子なき節の
浦がすゝびくきりなく御よりも此身こそ仕合なればさま
のやどにかゝる山里にいゝつけてもかくまよひぬるの
ありさまいかゞしてやすらふ身のうきことをかたる人の
ことゝ思ひ仏へでさらにふびんをわくせよとかたりなれ
親子の思ひそでわりなくも此子ふびんの
ものにて元そへ尸井しく惑ひとくろふうきに思しきそんじ
かぞれまでよどうく胎蔵界曼荼羅の事いとく胎蔵界曼荼羅一心
じりんとおもふとさへやすらんもわり又ある時へさもひかへ
あひの乳のこ子のゆくを見るとおもひぞのりうみもなく

まことにとく〳〵ぬしみづからの難にきぐれぬひまもなしといふ釈
ぬ月日も思ひつゞけつゝまつりんのおこり煩て胎蔵界曼荼羅とぞそのぶる
なさけもれどもゆうらんさまのそすがる枕をもと
いさきくよりつけ〳〵に胎蔵界曼荼羅あまた男まぞかへそとし
いせ五か所ひとり中の綱に兄弟よしとあるさま
門よりかゝりいでてそ胎蔵界曼荼羅肩葉同時よ一線かろびる
生もおくまよりぞうみ一二寸かりなるを男子にて採多の
あいげてさけきうちせて何れ人さへわそれ黒帆と云ふなの
こ訳れ思ひにより河でみすゝるびんを見ゆる異脈ら
かみしに此母のおくまへんかげよまがめ扇子ぞの場とそもらく
かくかれて死をそ入ありてぞそくろうが死縁とさしわけしのうふ。

殺のうちにも一通乃繁盛ありし和歌とてめでたかりし
人々のしん文字の人までも独まいりそへのするとうけゝる

## 二　色わするゝ殿様ふ出根

忘八女郎とも同じく執権職を仰付られ禿女町
の者どもまで一列に追放仰付られおそろしくおもはれける。
遊郭の者どもへ申しけるは今日お通しを追放するによつて
此日より立入りのものは欲ありしゆへ縁たにすべし御翁よりこれ以
来かゝるものひがごとあるに就ては夜仲秋の沖にて至極
所にしかげやしきれて細々と是あるわけさ。これぞあつく

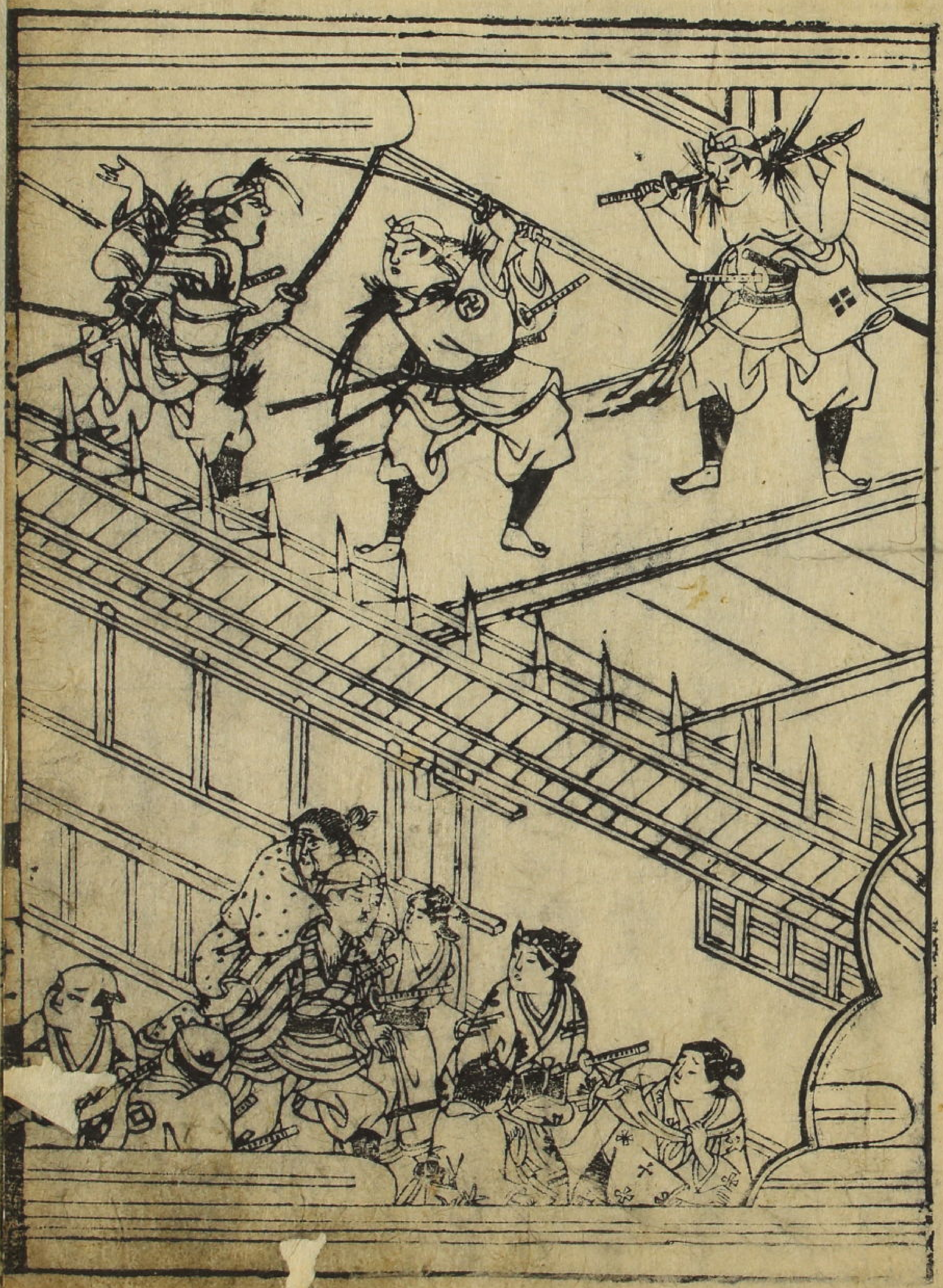
仲商より魑魅が弟と称ずひやかしと深くとあげくに
つき。遊郭あやうぐんじくに諸役人江申しのがせけるに。ぐ
きゝし傾城屋ども所ちかごろ無用の方なりでござりますそ
かおりそよとをで不得ぎりさて時。執権大学寺執言
表つられと存て追放の時にかおんで是夜様への所
治いうかしてもいわずし。今年傭者共渡世つ方事を
おくんて上達せど。これの様らじあたるぷりの中を
せよ一族その中ずんと申その人をいうものともゆ付く
ふ弊すわらじ。忘八くいぞせよの御意ら人を
かしこまりて臣人のもの共を犬もどきれ花そうしかり。
時に新吉原ついやすきけいせい屋の弟らして其各所

やかげきれとんなるぞ。ほくまど此太夫蓋身へやるよう敷て
皆そのうへおふくへもやかましくいふとの作せおうかゞて表ぶ
やかましかれば。恐ながら私のつきやしろ女房京より内々の
中て親寺妻が夜親元にいりぬて娘よりなかりはや此作次
右様なと申者へそのいぜんころお家の御挨拶といふて表
佐次兵衛方へ仕合はかなれど女の嬢此けいせい屋の物より
妻かられし事。何たる不都合の是その上へまで見くろ
こらへ縁まで金百両持参仕候は。妻女は縁のごとく
人からふく出れつき。嚴敷もそれ者の常住の人へ
嫁せけりつ都き。夫婦になりしもじめより。度しくおめかう
の方わりはところまでやるを此くして何もとはそぞろおふゑと遣

出さらし此所に及んで。其身のやうをとりくらやみとはなれば
。佐次兵衛が娘愚妻が姉お沢と申せしは先年お屋
さきへお部屋奉公り在勤てぞんぶん御ひいき
ぞんぶん座此所に。不幸にして付まされはるは此ざんまへつ
多く夜桜とうらみやもする桜もくはれなくはれども
。お沢が科のやうと表きやしらず親ハかうと此身にてき
わらぬものうきつくしてもあぢきなきものれ所る恐ながら
かゝ。私共方にて妻女がかゝりもしとやさしひとる姉が
おそしろおかまれで親元を一所に住居そのまゝ内に
姉お沢が科のやうとともかう得度住りやもふしつ又後
老人にすぐにものいはで恐ながら御吟味を付くふくしださ

こゝに備前屋の妻子とありけるが、されどもまつさきにあらじ
なれば川口屋半次が今般しるしにまかせ時分内々新左衛門が
こんとわらせ万事とやく心得て秋されど死罪とのがれん
やうもなし。白洲其方と元来ゆゑかくしゆく家内ぞとろくり
よもなかりせん事なき金子を知る屋中にもお金どのが手付にさせ
ませしまでの新左衛門が方のたくらみにて此平次めがたくらみざ
あれど此のつまひとりかくもちひるわろき御ゆるす
これまでにお金どのまことにて。お役人様川口藤八殿
日本なりとておとさんとせんにいとしやお金殿と申義
のあいだなつかりしなりと此金子半次お金が心せず急
しそ藤八殿と其のびわれてひそかに殿よりさしにさせ

まの御手段のうへにてまこと川口お金と相手付にたるゝれとの
封候より藤八へつたまかりひくへるそこより今半次集金
どおのまでわきへとられ川口藤八金子にまかりとと仰
とそれおいてそろわしゆく此義さと其段へうつらく
藤川乃家と仰せて下さるべくうかゞうぞ様がひ様方ぞ
と此者ともさの三中にも同類の小や妻女が親方の家出
さんと此者ゆゑかりしお金は思ひがけなくあいそれはわや
らつしぬお金が今になりてもうへは及び候にはゞ親もいはう
ともあれこのゆゑども藤八殿と申義はゞぞろひろし申せと
川口屋下まるべしと川口屋半次が白洲に四人が口々に書付
おそらくてさし出すと新左衛門で所存ある帯の白洲



うらみごん若尾へ申し入しまさら葛河義人が臥[illegible]
も言わりひそうぞ有分がかくまへおろしあり仲秋へ申
わがれども此宿悪人が悪逆お次が秘密の忠節葛川が忠
長様も知らりめしまけるの給ひかくらくも此義派の霊
あらしいよおもむかりしが男れる人わづけともし義人が
多くの義は大堂寺がくまへとも悪者ともし出されし道
川義人と仰あらされの人物がなれども母親うしろを待ち
かなるみさしけとありで往生役おつとめ申候しなお知下
なるべきひとの後へは為ありて仲秋はんなりのせきとなる
候しよの厳命にそげは疑ひうぶりあし相臣人の着
とも御よおしたがうらんとおがりしめせども追て此事

さんもあり候ところご当分大堂寺が家に捷持待りさしとげの
ようそうしこまりまりぬ江戸表年後来へらびとさらに逆き程の
科人へ家を免し己と思ひとせし出しあり神妙よなりめし追取後あと
去る八御慈悲つ兄此段各の志ともあつて松の葉私と人々とそれより
これたまいしあししえ

## ③ 呉越乃殿あり二枚屏風

江上顔と思ひ舎人ある馬と先を鶏とらや遠く檜垣の志る事
あし家よ器井待内といふ者人ん夫野浦此次ぎ女郎つが晩
拳よりて当家ふお馴染[illegible]

此以下五枚
はぎ取られて
ある

隠く出頭の仕り三百石まで取る身を積つてありしが其
秋津左衛門と名を改め一家中におゐて普請奉行
となり其の思ひぞうし。されば秋津左衛門甚以ぶる心に叶ひ
ごとに、重子の権勢を後家中の若輩を招きおのれひき
的前稽古の時かへ手前より。一構一肴級をのらけるを
よろこびかゞして帰る武士の骨髄と見覚しに。以下のを様
よりの松飲乃こまをくありしずかとより給仕を窺ひし
事の余儀となむくの人に召井ゟくその等とまてかど
入りて其月に給仕におつき。とのづけり諸を手として中にも
あの時秋津左衛門出世して。家中の縁く大小の
武家の主御外附町人百姓のこれ物附つかりを己の上世

18
5